

秋田県文化財調査報告書 第136集

# 蝦夷塚古墳群発掘調査報告書

—一般国道107号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1986・3

秋田県教育委員会

秋田県  
埋蔵文化財センター

# 蝦夷塚古墳群発掘調査報告書

—一般国道107号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1986・3

秋田県教育委員会



空から見た蛭夷塚古墳群（真上より） 高度 457.2mより 1985年10月26日撮影



空から見た蛭夷塚古墳群（西方向より） 高度 420mより 1985年10月26日撮影

## 序

豊かな現代生活をめざした地域開発の促進は、秋田県にとって重要な課題であり、交通網整備事業もその一つであります。一方、本県には先人が残した数多くの埋蔵文化財が存在しており、この貴重な文化遺産の保護もまた私たちの責務であります。

このたび、一般国道107号改良工事に伴う路線が蝦夷塚古墳群を通過することになったため、範囲確認調査の結果に基づき、本年度発掘調査を実施いたしました。

この結果、奈良時代の終末期古墳6基とそれに伴う土師器や須恵器と繩文時代の土壙や土器などが検出されました。古墳は本県において非常に数が少なく貴重な遺跡であります。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものであります。今後、多くの方々に活用され、埋蔵文化財保護に対する御理解と歴史研究の一助となれば幸いと存じます。

最後に、本書を刊行するにあたり、多大の御協力と御支援をいただいた秋田県土木部、秋田県平鹿土木事務所、福地土地改良区、雄物川町教育委員会、雄物川町郷土資料館、地元各位に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 斎藤 長

## 例　　言

- 1 本書は秋田県教育委員会が昭和60年9月2日から10月15日にわたって実施した、秋田県平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51番地に所在する蝦夷塚古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆は栗沢光男が行い、編集は秋田県埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 別編Iの「蝦夷塚古墳群の火山灰の鉱物化学的分析」は、東北大学農学部庄子貞雄教授・山田一郎助手にお願いした。
- 4 第2図は、昭和59年12月5日に雄物川町郷土資料館が実施した蝦夷塚古墳群範囲確認調査で確認された古墳の分布図（同町郷土資料館より本書掲載許可を得たものである）と、本年度秋田県教育委員会が実施した蝦夷塚古墳群発掘調査で検出された古墳の実測図を併せて作成した、蝦夷塚古墳群の古墳分布状況図である。
- 5 参考図版と蝦夷塚古墳群出土玉類実測図・計測表の玉類は同一のものである。これは昭和33年7月地主の佐藤金一氏が7号墳の付近から採集したもので、現在は雄物川町郷土資料館に展示されている。本書への掲載は同町郷土資料館の御好意による。
- 6 土色、土器の色調の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
- 7 古墳には検出順に秋田県教育委員会（昭和58年度）と雄物川町郷土資料館（昭和59年度）が行った蝦夷塚古墳群範囲確認調査からの通し番号を付した。また秋田県教育委員会が行った蝦夷塚古墳群範囲確認調査で付したSD（溝または溝状遺構）番号のうち、古墳周囲のSD番号は欠番とした。他の遺構にはその性格ごとに検出順に通し番号を付した。

## 目 次

### 序

### 例 言

第1章 はじめに.....	1
第1節 発掘調査に至るまで.....	1
第2節 調査の組織と構成.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	3
第1節 立地と環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 発掘調査の概要.....	8
第1節 遺跡の概観.....	8
第2節 調査の方法.....	9
第3節 調査の経過.....	10
第4章 調査の記録.....	13
第1節 検出遺構と遺物.....	13
第5章 まとめ.....	32
別編I 蛤夷塚古墳群の火山灰.....	35

## 図 版 目 次

巻首図版 1 空から見た蛤夷塚古墳群	
巻首図版 2 空から見た蛤夷塚古墳群	
第1図版 遺跡遠景.....	37
第2図版 発掘調査前のようす 発掘調査終了後.....	38
第3図版 調査風景.....	39
第4図版 調査風景.....	40
第5図版 遺跡基本土層図.....	41
第6図版 1号墳検出状況 1号墳完掘状況.....	42
第7図版 1号墳周囲火山灰検出状況 1号墳周囲土層.....	43
第8図版 1号墳周囲遺物出土状況.....	44
第9図版 2号墳検出状況 2号墳完掘状況.....	45
第10図版 2号墳周囲土層 2号墳周囲開口部.....	46
第11図版 2号墳周囲遺物出土状況.....	47
第12図版 3号墳検出状況 3号墳完掘状況.....	48
第13図版 3号墳周囲火山灰検出状況 3号墳周囲土層.....	49
第14図版 7号墳検出状況 7号墳完掘状況.....	50
第15図版 13号墳検出状況 13号墳完掘状況.....	51

第16図版	1号墳出土土器	52
第17図版	1号墳出土土器	53
第18図版	2号墳出土土器	54
第19図版	調査区外北側畑地表採遺物	55
参考図版	蛭夷塚古墳群出土玉類（雄物川町教育委員会所蔵）	

## 挿 図 目 次

第1図	蛭夷塚古墳群と周辺の遺跡	2
第2図	秋田県内古墳分布図	5
第3図	蛭夷塚古墳群の古墳分布状況図	7
第4図	遺跡土層柱状図	8
第5図	グリッド配置図	9
第6図	遺構配置図	11・12
第7図	1号墳実測図	15・16
第8図	1号墳出土土器(1)	17
第9図	1号墳出土土器(2)	18
第10図	1号墳出土土器(3)	19
第11図	1号墳出土遺物(4)	20
第12図	2号墳実測図	21・22
第13図	2号墳出土土器(1)	23
第14図	2号墳出土土器(2)	24
第15図	3号墳実測図	25・26
第16図	7号墳実測図	27
第17図	13号墳実測図	28
第18図	S K01・02・03・04土壤実測図	30
第19図	S D01溝跡出土遺物	31
第20図	S D04溝跡出土土器	31
第21図	調査区外北側畑地表採遺物	33
	蛭夷塚古墳群出土玉類実測図・計測表（参考資料）	56

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表	3
第2表	秋田県内古墳一覧	6
第3表	1号墳出土遺物観察表	20
第4表	2号墳出土遺物観察表	24
第5表	一次鉱物組成	35
第6表	粒度組成	35

# 第1章 はじめに

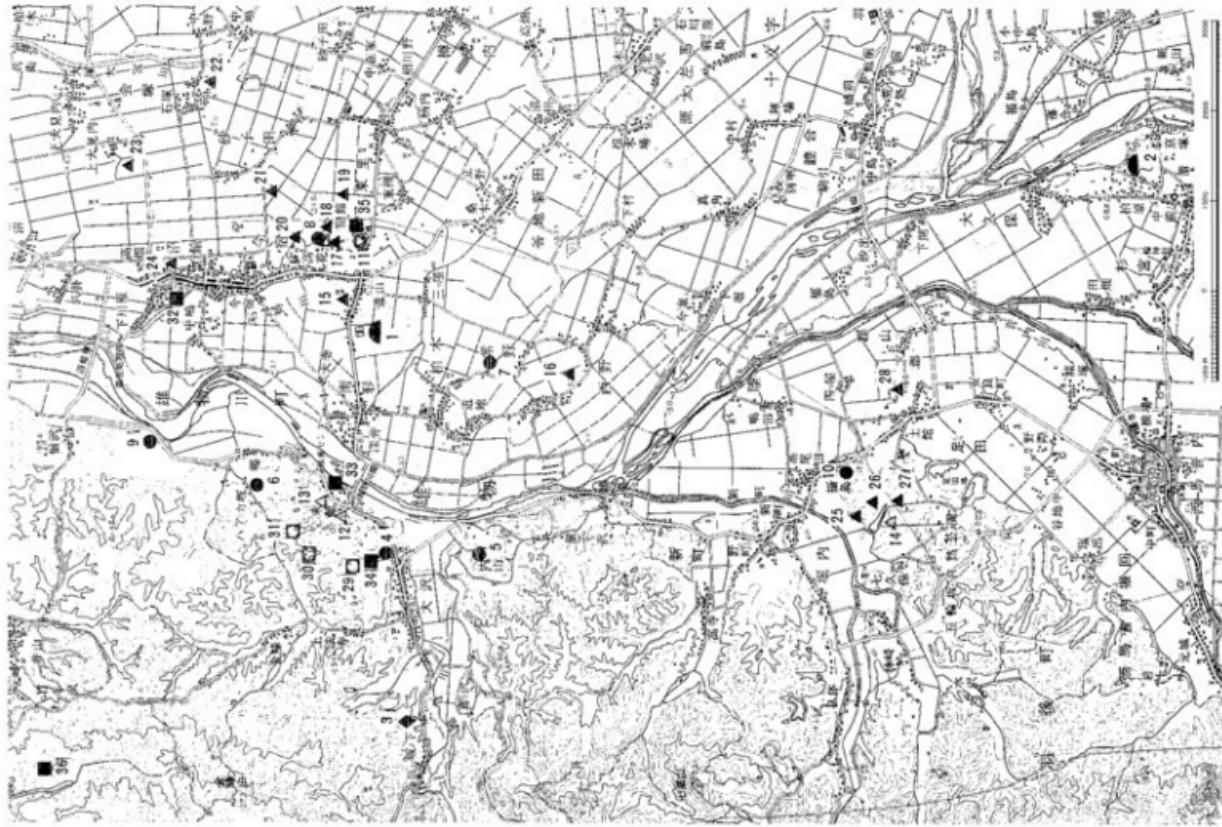
## 第1節 発掘調査に至るまで

雄物川町にかかる一般国道107号のうち東里部落から大沢部落までは道路幅も狭いうえに急なカーブなどもあり、交通量の増加に伴いスムーズな流れを得るために改良を要望されていた。

このため秋田県土木部では、東里部落を起点に造山、南形、深井部落の南側を迂回して大沢部落に至る全長約4kmの一般国道107号バイパスの建設を計画したが、路線の一部が周知の遺跡である蝦夷塚古墳群の区域内を通過するため、秋田県土木部から文化財保護法による発掘調査の依頼が秋田県教育委員会にあった。これを受けた秋田県教育委員会が昭和58年度の蝦夷塚古墳群範囲確認調査に基づいて、本年度緊急発掘調査を実施したものである。

## 第2節 調査の組織と構成

遺跡名	蝦夷塚古墳群
遺跡所在地	秋田県平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51番地
調査期間	昭和60年9月2日～10月15日
調査対象面積	1,444m <sup>2</sup>
調査面積	1,400m <sup>2</sup>
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田陽一郎・栗沢光男（秋田県埋蔵文化財センター 文化財主事）
事務担当者	加藤 進（秋田県埋蔵文化財センター 主査）、佐藤 健（同 主事）
調査作業員	大和谷長右エ門 佐々木政吉 大和谷哲治 深川専之助 佐々木養吉 安部 正松 佐藤嘉太郎 小野茂治 高橋正男 大藏一男 佐々木豊 畠山總一郎 小西良雄 長沢潦 石渡萬治郎 福岡芳太郎 佐藤重次郎 佐藤喜一 佐々木嘉信 大日向倉松 佐野真由美 鈴木多津子 武田明子 小松浩子 土田 寿子 佐藤喜子
整理作業員	高橋フサ子 皆川恵子 斎藤美江子 肯谷 透
調査協力機関	秋田県土木部 秋田県平鹿土木事務所道路課 福地土地改良区 雄物川町教育委員会 雄物川町郷土資料館



(国土地理院五万分の1「茨城」使用)

第1図 蝶ヶ原古墳群と周辺の遺跡

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 立地と環境

蝦夷塚古墳群の存在する雄物川町は、南北約60km、東西約15kmにおよぶ横手盆地の南西部に位置し、北は大森町・大雄村、東は平鹿町、南は十文字町・羽後町、西は東由利町と接し、面積73.39km<sup>2</sup>、人口約1万3千人の町である。

町の中央部を奥羽山系に源を発する雄物川が諸河川を受け入れながら北流し土地を二分している。雄物川の西岸は出羽山地の一角を占める山麓地帯で、東岸は平坦肥沃な典型的水田地帯となっている。また、大曲市から雄物川沿いに街道が通じ、町の南部を東西に由利・平鹿両郡を結ぶ国道107号が通じている。

蝦夷塚古墳群は、北緯39°16'30"、東経140°25'30"に位置し国道107号を横手市から本荘市に向かう途中の雄物川町造山部落の南側に存在する。雄物川から東へ約1.8kmの地点で雄物川の洪水によって形成された自然堤防上の微高地に立地している。遺跡のある微高地は南北に長く、西側は雄物川の旧河川敷内で一段低くなっている。南・東側は緩い傾斜面となっている。

遺跡の標高は49m前後の平坦地であり、遺跡付近のほとんどは水田であるが、一部転作によって畑地となっている。

第1表 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	蝦夷塚古墳群	奈良・平安	13	末館日窯跡	奈良・平安	25	新城川地区遺跡	奈良・平安
2	柏原古墳群	〃	14	七瀧窯跡	〃	26	ひばり野Ⅰ遺跡	〃
3	新造Ⅰ遺跡	旧石器	15	造山神社裏遺跡	〃	27	ひばり野Ⅱ遺跡	〃
4	根羽子沢遺跡	縄文	16	上西野遺跡	〃	28	城神越り遺跡	〃
5	内山田遺跡	〃	17	雄物川高校Ⅱ遺跡	〃	29	大沢森経塚	中世
6	鷹遺跡	〃	18	雄物川高校裏遺跡	〃	30	北野一号遺跡	〃
7	常野遺跡	〃	19	鷹館Ⅱ遺跡	〃	31	北野二号遺跡	〃
8	雄物川高校Ⅰ遺跡	〃	20	今宿南田遺跡	〃	32	沼薙城	中世城跡
9	兵部ヶ沢遺跡	〃	21	下作の瀬遺跡	〃	33	末館	〃
10	新城川遺跡	〃	22	石塚遺跡	〃	34	館森館	〃
11	十三塚遺跡	弥生	23	大見内遺跡	〃	35	通館	〃
12	末館Ⅰ窯跡	奈良・平安	24	千刈田遺跡	〃	36	赤館	〃

## 第2節 歴史的環境

西方から出羽山地、雄物川、沖積平野という自然地形の雄物川町（地域）は、原始・古代においても自然条件が人々の生活に好適であったらしく、多くの遺跡が発見されている（第1図、第1表）。ナイフ形石器を出土した旧石器時代の新道I遺跡<sup>(註1)</sup>、県内最古の組石の検出された撻文時代前期の根羽子沢遺跡などは雄物川西岸の出羽山地麓にあって、東里地区の十三塚遺跡のような弥生時代とそれ以降の時代の遺跡は東岸の沖積平野に主として立地している。

奈良時代の天平5年（733年）に出羽柵が庄内地方から秋田高瀬水岡に移されるとまもなく、内陸横手盆地にも律令制が及び、雄勝郡が建てられる。天平宝字3年（759年）には雄勝城が築城されて盆地平野部の積極的な開発が進み多くの集落が形成され現在の雄物川町一帯も確実に令制下に入る。平鹿町中藤根、下藤根などの遺跡はこの期の代表的集落で、雄物川町末館地区的古墳群は須恵器を城柵官衙遺跡へ供給した生産遺跡である。

秋田県内の古墳遺跡は殆んど終末期の群集墳で、米代川中・下流域を除く各地にその分布が見られ、その位置は令制下の城柵官衙遺跡周辺および駅家とその道筋に多い。10kmとはなれていない羽後町新城地区に雄勝城の擬定地足田遺跡<sup>(註4)</sup>が存在することをも考慮する必要もある。この古墳群の周辺には造立神社、首塚神社の祀られている径10m程の円墳状の塚など古墳の言い伝えを残している遺跡が結構多い。やや離れた沼館地区の千刈田からは永延3年（989年）銘の瑞花双鳳文八稜鏡、奈良時代に勧請と伝えられる大沢地区の上法寺遺跡からは同じ平安時代の双鳳文八稜鏡の出土があり、古代の乏しい文献資料を補う豊かな遺物、遺跡の存在する地域である。また、後三年の役に清原家衛が立てこもり源義家を撃退した「沼柵」は、沼館であるとされている。このように雄物川町一帯は、原始においては川や山の幸に恵まれ、古代以降においては浮因長清原氏の存在でも理解されるように、それに加えて豊かな生産力を約束された地帯であったと考察される。なお古代においては雄物川西部の大沢地区は雄勝郡雄勝郷に、川の東部沖積地地域は平鹿郡邑知郷<sup>おうち</sup>に含まれていたと見られている。

註1 雄物川町役場『雄物川町郷土史』 1980（昭和55年）

註2 秋田考古学協会『中藤根遺跡』 1974（昭和49年）

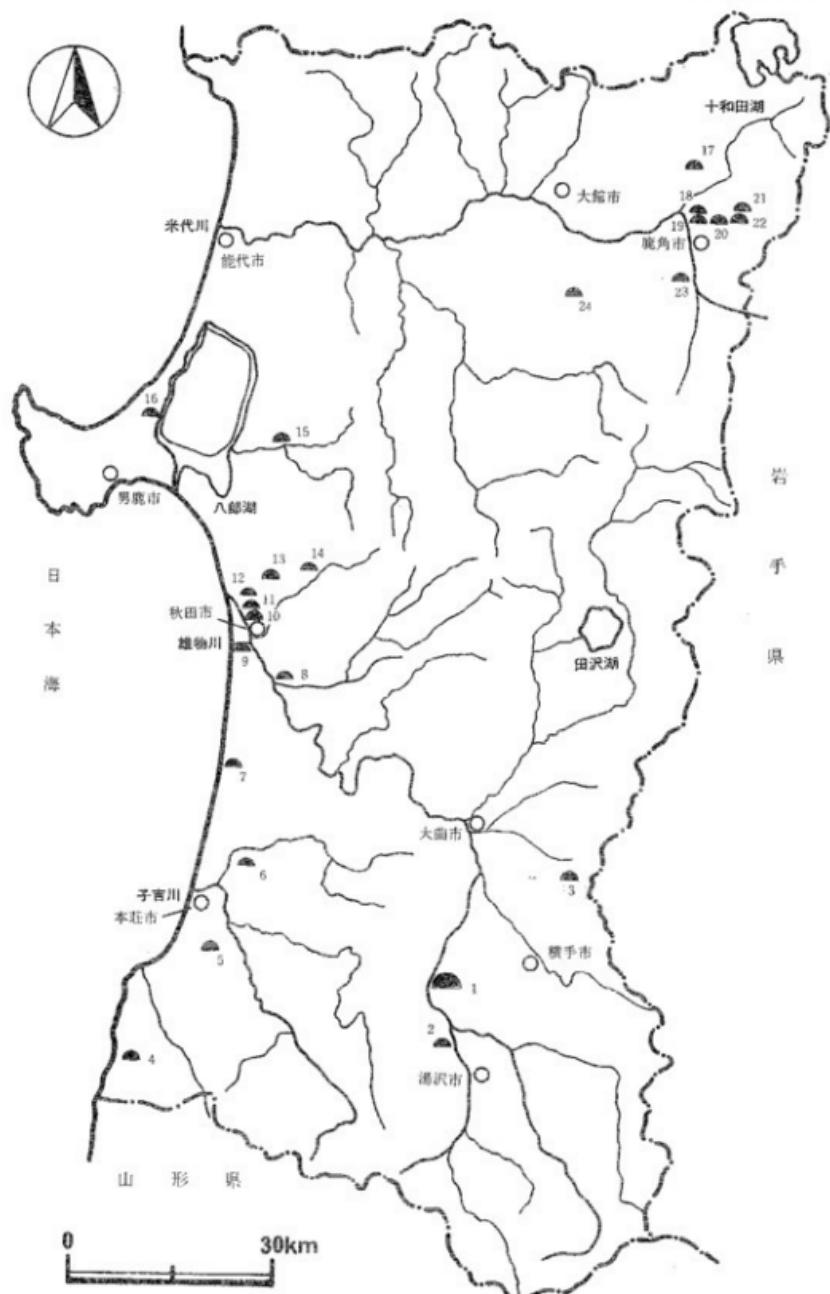
註3 秋田県教育委員会『下藤根遺跡発掘調査報告書』 1976（昭和51年）

註4 秋田県教育委員会『足田遺跡発掘調査概報』 1967（昭和42年）

秋田県教育委員会『足田遺跡第6次発掘調査略報』 1972（昭和47年）

羽後町教育委員会『足田遺跡第7次発掘調査略報』 1974（昭和49年）

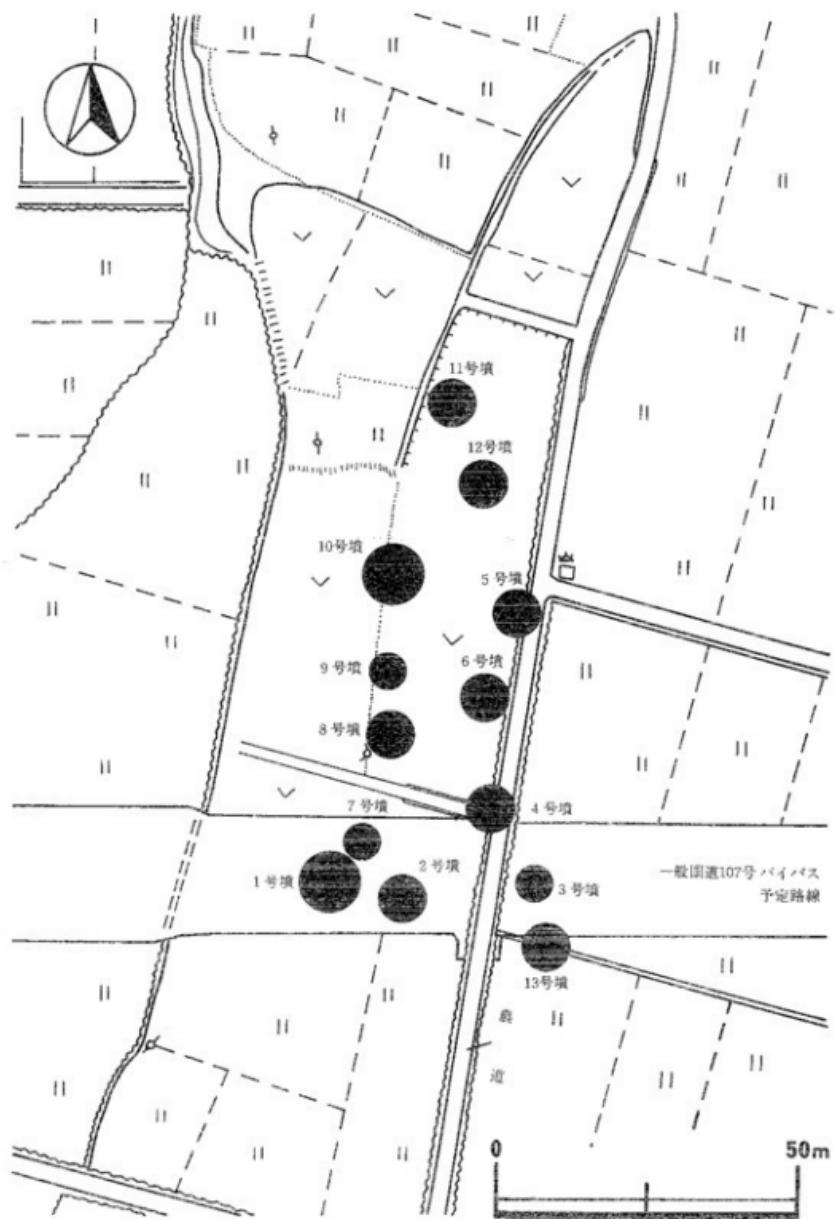
註5 註1と同じ



第2図 秋田県内古墳分布図

第2表 秋田県内古墳一覧

番号	遺跡名	所在地	外形	立地	出土品
1	蝦夷塚古墳群	平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51	円	自然堤防上	玉類・刀子・鉄鎌土師器
2	柏原古墳群	雄勝郡羽後町大久保字柏原	円	河岸段丘上	直刀太刀・刀子・鉄鎌鍔斧・銅先・土師器
3	石森古墳	仙北郡六郷町六郷東根字中村	円	台地	裁手刀
4	管崎古墳	由利郡象潟町大沢川	壇城		
5	井岡古墳	由利郡西目町西目井岡客殿森		台地	子持勾玉
6	山田古墳	本荘市山田		山麓	
7	道川古墳	由利郡岩城町道川		海岸	直刀
8	小阿地古墳群	秋田市四ツ小屋小阿地字坂の下	円	台地	裁手刀・直刀・八花鏡 須恵器・玉類
9	新屋浜古墳	秋田市新屋雄物川河川敷	壇城		木棺・瓦
10	蛭根古墳	秋田市寺内字蛭根	円	台地	
11	根並山古墳	秋田市寺内字神尾敷	円	台地	
12	空素沼古墳	秋田市寺内空素沼	円	台地	
13	小林Ⅱ古墳	秋田市上新城小林			
14	久保台古墳	秋田市太平八田字久保台	円	台地	裁手刀・直刀・須恵器
15	岩野山古墳群	南秋田郡五城日町上樋口字梅沢	円	台地	玉類・刀子・裁手刀 太刀・土師器
16	えぞが台古墳	南秋田郡若美町鶴ノ木 字えぞが台112		台地	裁手刀
17	高田古墳	鹿角市十和田毛馬内字高田			
18	曲谷地A古墳	鹿角市十和田曲谷地			
19	曲谷地B古墳	鹿角市十和田曲谷地			
20	枯草坂古墳	鹿角市十和田錦木字枯草坂	円	台地	玉類・太刀・金具 直刀・鉄鎌
21	申ヶ野古墳	鹿角市十和田錦木字申ヶ野	円	台地	
22	室田古墳	鹿角市十和田錦木字室田	円	平地	玉類
23	三光塚古墳	鹿角市尾去沢字東在家	円	平地	玉類
24	中野古墳	北秋田郡比内町中野		台地	土師器



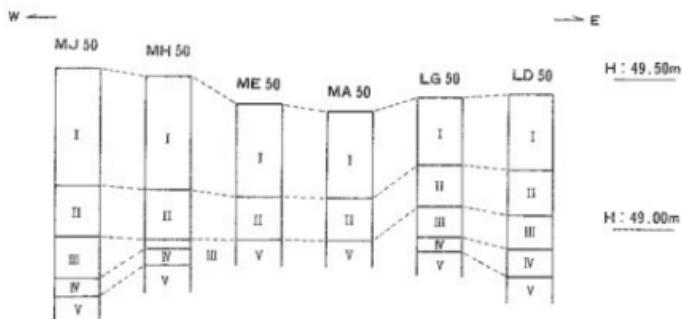
第3図 蝦夷塚古墳群の古墳分布状況図

## 第3章 発掘調査の概要

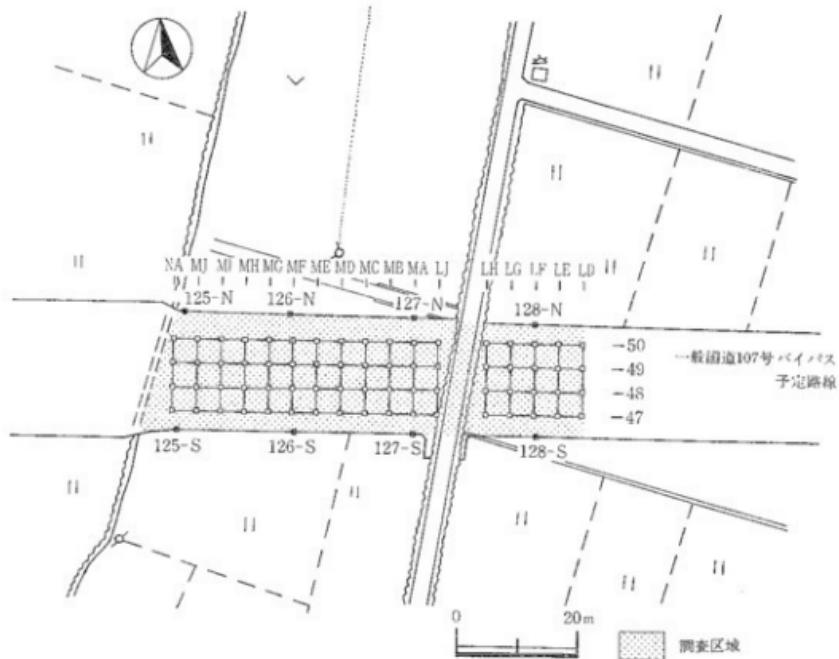
### 第1節 遺跡の概観

蝦夷塚古墳群の立地する地域は、昭和30年頃の耕地整理前までは水の便が悪く水田には適さないため一部畠地として利用されたものの、ほとんど草や雜木が繁茂する荒地であったらしい。この中に墳丘と考えられる小山が点在していたと言われるが、現在は水田および畠地となっている。調査対象となった地区は水田跡の平壠地であり、南北に走る農道によって分断されている。この西側に1号墳・2号墳・農道にかかる4号墳・SK01土壙・SK02土壙・SK04土壙・SD01溝・SD04溝が位置し、東側に3号墳・13号墳・SK03土壙・SD06溝が位置している。なお、調査区の表土は全域にわたってかつての耕地整理などによって攪乱を受けており、農道西側調査区においては、ほとんど地山面まで攪乱がおよんでいた。調査区の土層は50ラインに入れた東西トレーニングの北壁の土層観察から以下の通り分けられた。

- 第I層 黒褐色土 (10Y R 2%) 盛土整地層である。須恵器片、縄文土器片が若干混入している。
- 第II層 黒褐色土 (10Y R 2%) 旧水田の耕作土である。縄文土器片、須恵器片、土師器片が少量混入している。
- 第III層 黒色土 (10Y R 2%) 炭化物、浅黄色土粒子少量と縄文土器片、須恵器片、土師器片が少量混入している。
- 第IV層 褐灰色土 (10Y R 4%) ~ 灰黄褐色土 (10Y R 4%) 粘質土の地山漸移層である。
- 第V層 浅黄色土 (10Y R 4%) 粘質土でよく締っている地山である。



第4図 遺跡土層柱状図



第5図 グリッド配置図

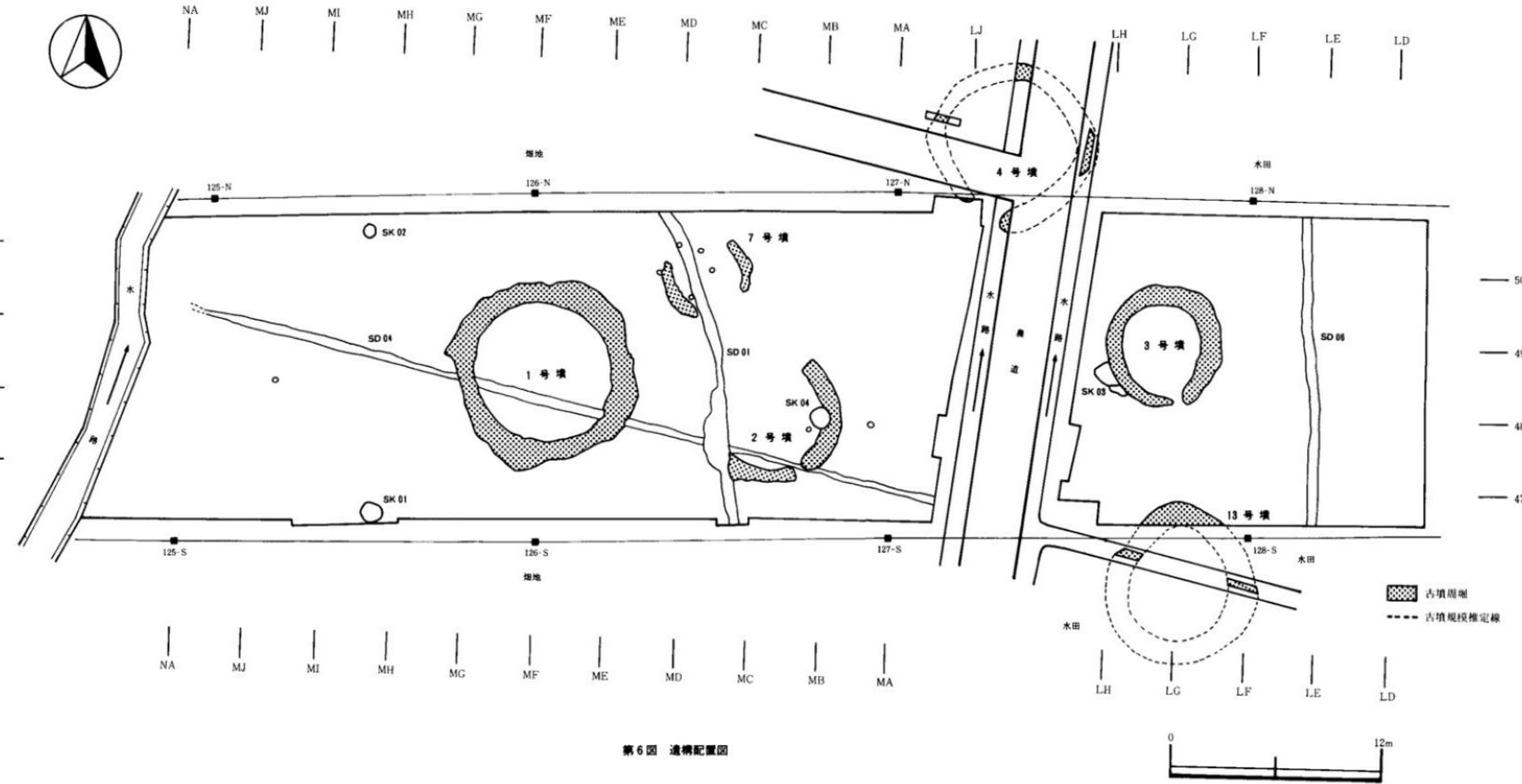
## 第2節 調査の方法

秋田県平鹿土木事務所道路課が国道107号バイパス建設のために設定した路線幅杭抜粧127-Nと127-Sを結ぶ直線を基準線として、この線上にグリッド原点MA50を取り、この点と直交する線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。なお127-Nと127-Sを結ぶ基準線は磁北から東へ $0^{\circ} 25' 39''$ 偏しているが、一応これを南北ラインとし、この線上のグリッド原点MA50と直交する線を東西ラインとした。また南北ラインには2桁の算用数字、東西ラインにはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド隅の杭を利用して簡易遺り方測量で行い、縮尺は20分の1とした。また4号墳・13号墳の一部や農道・水路等は平板測量で行い、縮尺は100分の1とした。なお20分の1で実測した遺構平面図と100分の1で実測した遺構・農道・水路などの平面図から200分の1の遺構配置図など必要な図面を作成した。

### 第3節 調査の経過

9月2日、発掘調査に先立って、調査区内の草刈り作業とプレハブの設置および発掘器材の搬入を行う。この間造山部落老人憩いの家で発掘調査説明会を行った。3日、昨日に引き続き調査区内の草刈作業を行うと共に調査区内に捨てられていた西瓜約100個の除去作業を実施した。次に土捨て場とした調査区外東側を隔てる排水路に木橋を設置した。4日、発掘前の調査区全景を撮影したあと、グリッド坑打設と昭和58年度範囲確認調査を基に調査区東端部から西へ掘り下げを開始した。調査区を南北に横切って走る農道に沿って排水路があり、キャクトラ（堆土運搬用）移動の際にこの排水路を越えて行くため、平鹿土木事務所道路課から橋状に钢板を設置していただいた。5日、3号墳周堀とSD06溝の平面プランを検出した。6日、上層観察のため調査区北東隅から西へ50ラインに沿って幅50cmのトレーニングを掘り始める。7日、昨晩から今朝にかけて降った雨で調査区に水がかなり溜っており排水作業を行いながら調査を進めていく。9日、農道の西側調査区内の掘り下げを開始する。またこの地区的土捨て場とした調査区外西側を隔てる排水路に木橋を設置した。13日、雨のため遅れていたグリッド坑打設作業を終了した。この日、北海道大学林謙作助教授が来跡、調査方法について御教示いただいた。17日、7号墳周堀とSD01溝の平面プランおよびピット1～5を検出した。19日、2号墳周堀とSD04溝の平面プランおよびピット6～8を検出した。20日、掘り下げを進めていくが出土遺物の量は少ない。21日、1号墳周堀の平面プランを検出した。25日、範囲確認調査時の古墳周堀確認面までの掘り下げを終えて、調査区の精査と3号墳から順に調査を開始する。26日、SK01土壤の平面プランとピット9を検出した。27日、あらたに13号墳周堀の平面プランを検出した。28日、土層図作成を終了し、50ラインに沿って残した土層観察用ベルトを除去した。30日、LJ50グリッド北壁下と調査区内農道西側の排水路でわずかであるが4号墳周堀の平面プランを検出した。この頃から雨の日が多くなり作業に支障をきたしてきた。10月1日、ベルト除去をほぼ終了し精査を行ったところ、SK02土壤の平面プランを検出した。3日、SK03土壤の平面プランを検出した。3、4日の両日と9日に福地小学校の先生と児童一行が見学のため来跡した。5日、大森町郷土史研究会一行が来跡した。7日、SK04土壤の平面プランを検出した。8日、雄物川町文化財保護審議会が来跡した。11日、各遺構の掘り下げと精査をほぼ終了したが、出土遺物の量は全般に少ない。14日、各遺構その他の細部実測および写真撮影を終了した。この日秋田大学新野直吉教授が来跡し、調査について御教示いただいた。また雄物川町富田弘二町長が来跡した。15日、1号墳の補足調査をし発掘後の調査区全景を撮影したあと、発掘器材を埋文センターへ送り、プレハブの撤去を行い本調査を終了した。



第6図 遺構配置図

## 第4章 調査の記録

### 第1節 検出遺構と遺物

#### 1. 古 墳

本調査において、古墳6基とその内外から土師器、須恵器、鉄製品を検出した。以下これについて述べる。

##### 1号墳（第6・7図、第6～8図版）

位置：M D47～49、M E47～49、M F47～49、M G48・49グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

周堀：地山面で検出された。平面形はほぼ円形を呈している。規模は内周の直径7.20～7.80m、外周の直径10.00～10.80m、上面幅0.88～1.86m、底面幅0.15～1.10m、深さ0.15～0.73mである。底面は凹凸している。周壁面は内周壁が急傾斜で立ち上がっているが、外周壁は内周壁よりは緩い傾斜で立ち上がっている。

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：S D04溝に切られている。

出土遺物：周堀内埋土中より、須恵器片、完形の土師器杯1個（第8図5）、復原により完形となった底部穿孔の土師器甕1個（第9図12）および土師器片など少量と、刀子片3点、鉄鎌片2点、石鎌2点が出土したが図示できるものは少なかった。

その他：周堀内北部の埋土上面から深さ0.15mの所で、範囲が0.95×0.52mで、厚さ0.03mの焼土を検出した。

##### 2号墳（第6・12図、第9～11図版）

位置：M A47・48、M B46～47、M C46～48グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

周堀：地山面で検出された。平面形は南東部と北部が切れ、「ハ」の字に近い形を呈しているが、本来は南東部のみが開口する馬蹄形の周堀であったと思われる。規模は内周の直径約5.90m、外周の直径約8.00m、上面幅0.60～1.06m、底面幅0.34～0.77m、深さ0.20～0.28mである。底面はほぼ平坦である。周壁面は内外周壁面とも急傾斜で立ち上がっている。なお切れ幅は南東部約0.46m、北部約5.00mである。

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：S D01・04溝・S K04土壤に切られている。

出土遺物：周囲内埋土中より須恵器片、完形で底部穿孔の土師器杯1個（第13図1）、復原によりほぼ完形となった土師器甕1個（第13図3）および土師器片などが少量出土したが、図示できるものは少なかった。

### 3号墳（第6・15図、第12・13図版）

位置：L F48・49、L G48・49、L H48・49グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

周囲：第Ⅲ層上面で検出された。平面形は南東部が開口し馬蹄形を呈している。規模は内周の直径4.46～5.05m、外周の直径6.40～6.80m、上面幅0.50～1.35m、底面幅0.46～1.00m、深さ0.10～0.52mである。底面は凹凸が激しい。周壁面は内周壁がほぼ緩やかに立ち上がっていいるのに対し、外周壁は急傾斜で立ち上がっている。開口幅は約0.58mである。

主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：S K03土壤を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

### 4号墳（第6図）

位置：L H50・L I50・L J50グリッド。調査区外北側の農道および畠地。

墳丘部：大部分が調査区外北側の農道および畠地に位置しているため、墳丘残存の有無を確認することはできなかった。

周囲：L I50・L J50グリッド北壁下とL I50グリッドの排水路内の地山面でわずかであるが検出された。昭和58年度範囲確認調査を基に復原すれば、ほぼ円形を呈しているものと思われ、規模は内周の直径6.50～7.40m、外周の直径8.50～9.00m、上面幅0.80～1.40mであると推定される。北西部の切れ幅は約2.03mである。

主体部：墳丘部と同様に確認することはできなかった。

遺構の切り合い関係：なし

出土遺物：遺物は出土しなかった。

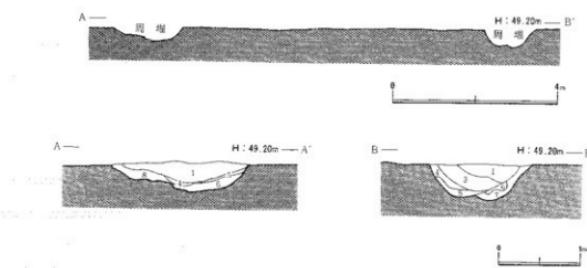
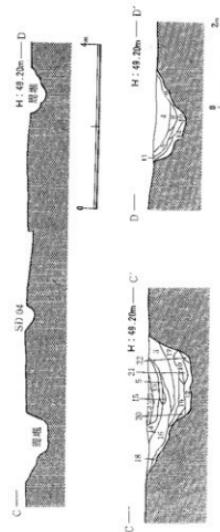
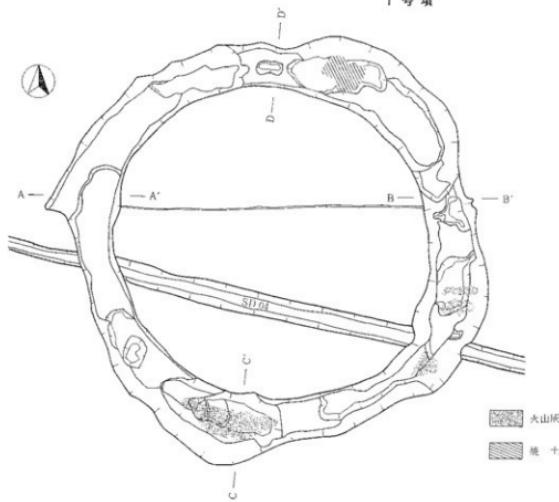
### 7号墳（第6・16図、第14図版）

位置：M C49・50、M D49グリッド。

墳丘部：水田造成（耕地整理）のため削平を受け、すでに失われていた。

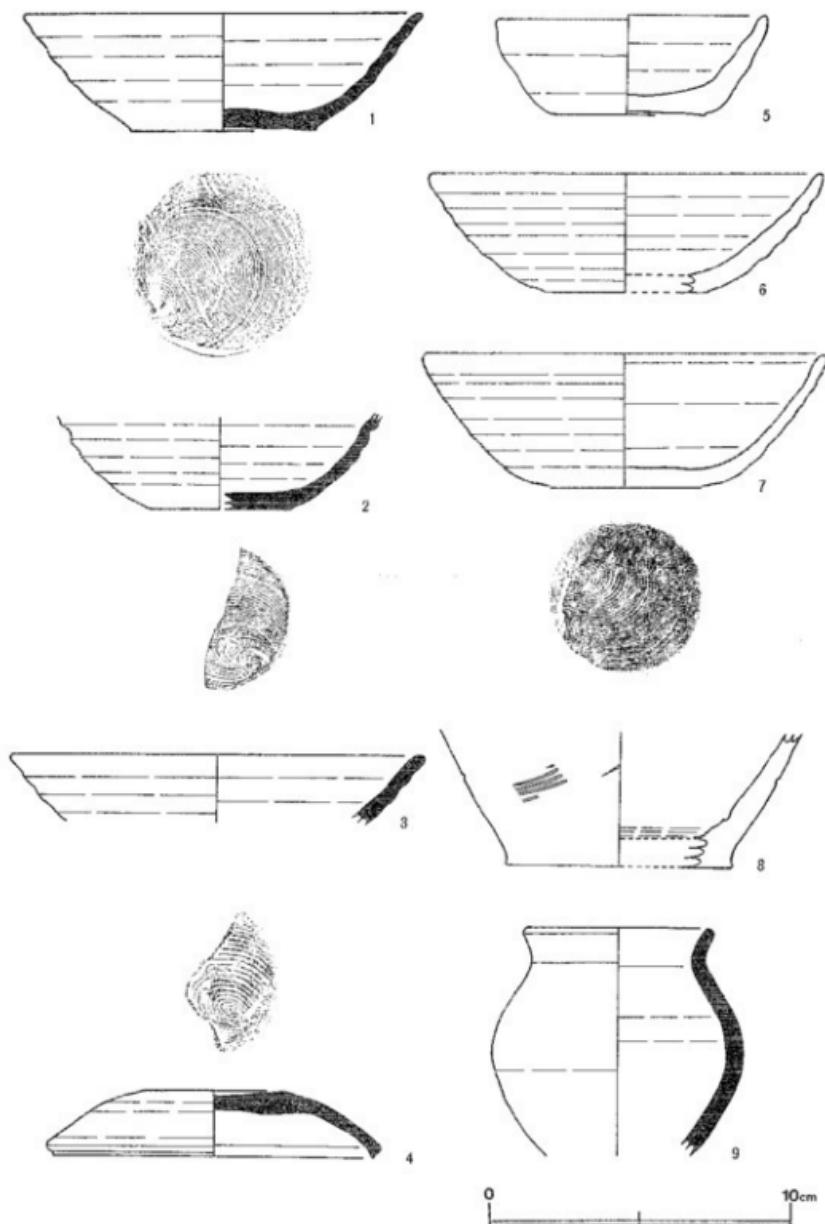
周囲：地山面で検出された。平面形は南部と北部が切れ、「い」の字に近い形を呈している。規模は内周の直径約3.56m、外周の直径約5.04m、上面幅0.44～0.82m、底面幅0.32～0.58m、深さ0.10～0.21mである。底面はほぼ平坦である。周壁面は内外周壁とも急傾斜で立ち上がっている。なお切れ幅は南部約2.80m、北部約3.70mである。

1号填

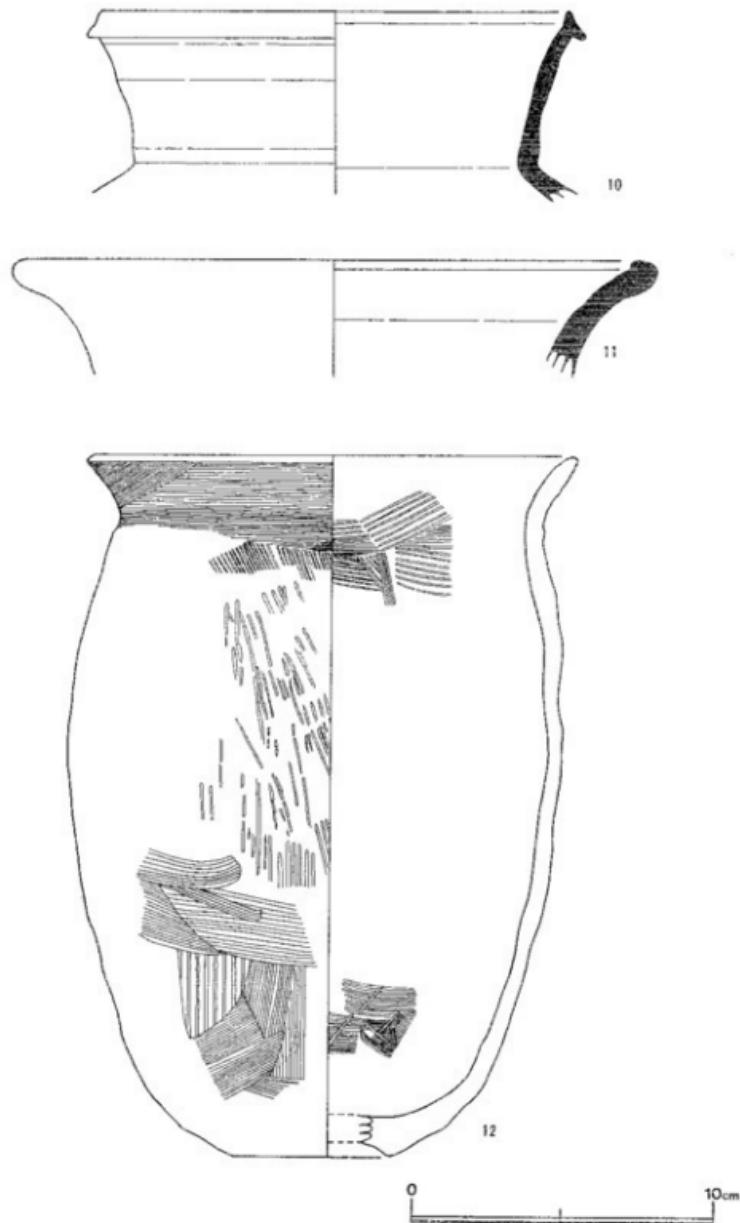


- 1号填剖面土层  
 1. 黑色土 10YR 4/2  
 2. 棕色带黑色土 10YR 4/2 (火山灰)  
 3. 黑色土 10YR 4/2  
 4. 黑色土 10YR 4/2  
 5. 黑褐色土 10YR 4/2  
 6. 黑色土 10YR 4/2  
 7. 浅黄色土 5Y 7/2  
 8. 浅黄色土 5Y 7/2  
 9. 黑色土 10YR 4/2  
 10. 黑褐色土 10YR 4/2  
 11. 棕色带黑色土 10YR 4/2  
 12. 浅黄色土 2.5Y 7/2  
 13. 黑色土 10YR 4/2  
 14. 黑色土 10YR 4/2  
 15. 黑色土 7.5YR 4/2  
 16. 黑色土 10YR 4/2  
 17. 黑色土 10YR 4/2  
 18. 黑褐色土 10YR 4/2  
 19. 黑色土 7.5YR 4/2  
 20. 黑色土 10YR 4/2  
 21. 棕色带黑色土 2.5Y 7/2  
 22. 浅黄色土 5Y 7/2

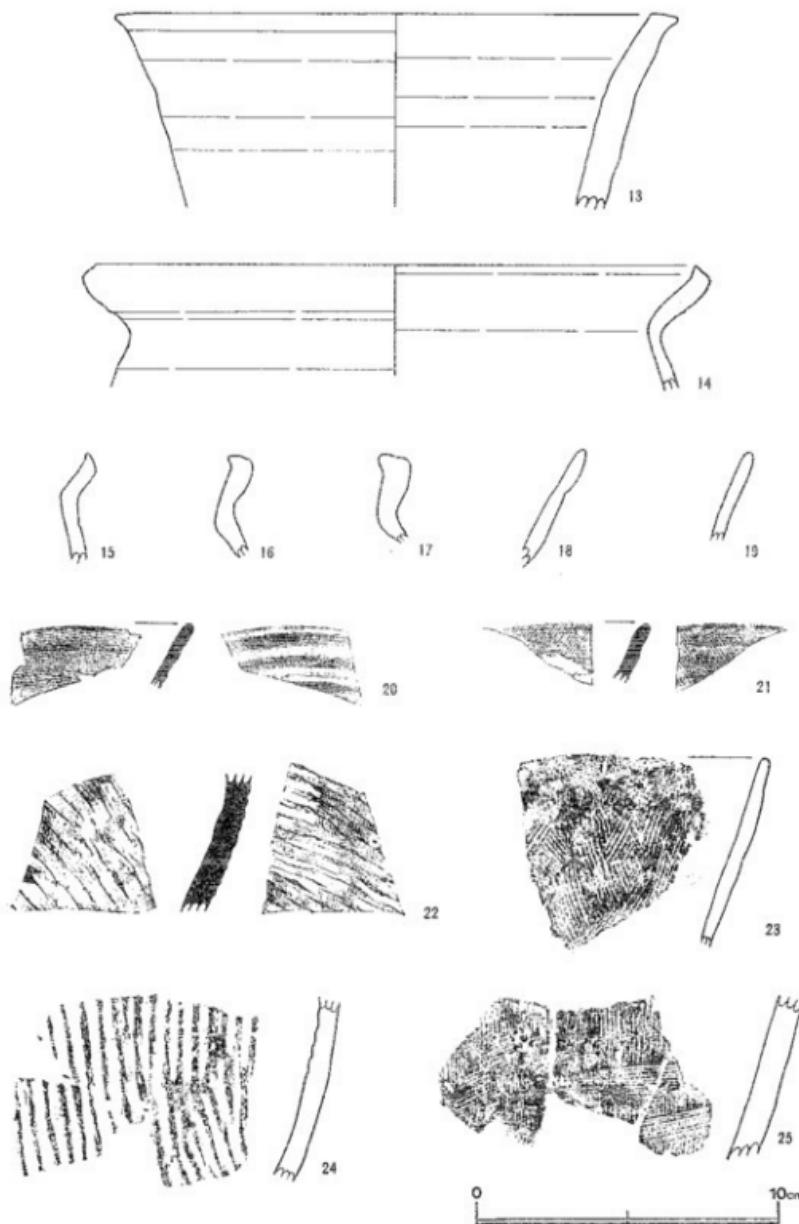
第7图 1号填实测图



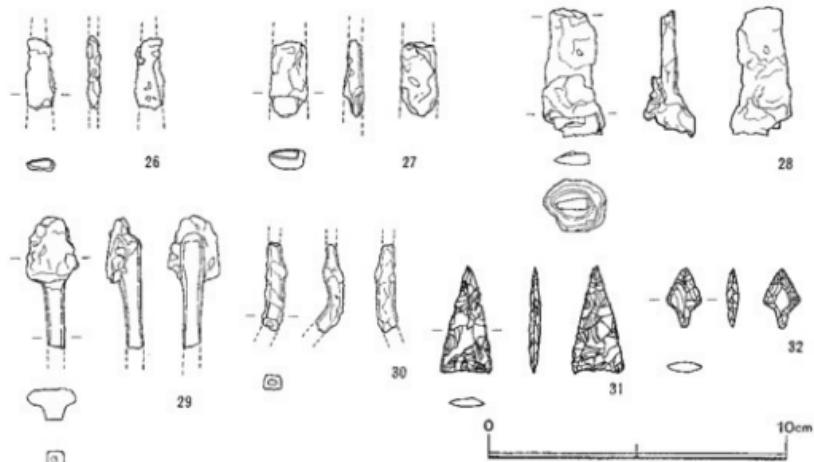
第8図 1号墳出土土器(1)



第9図 1号墳出土土器(2)



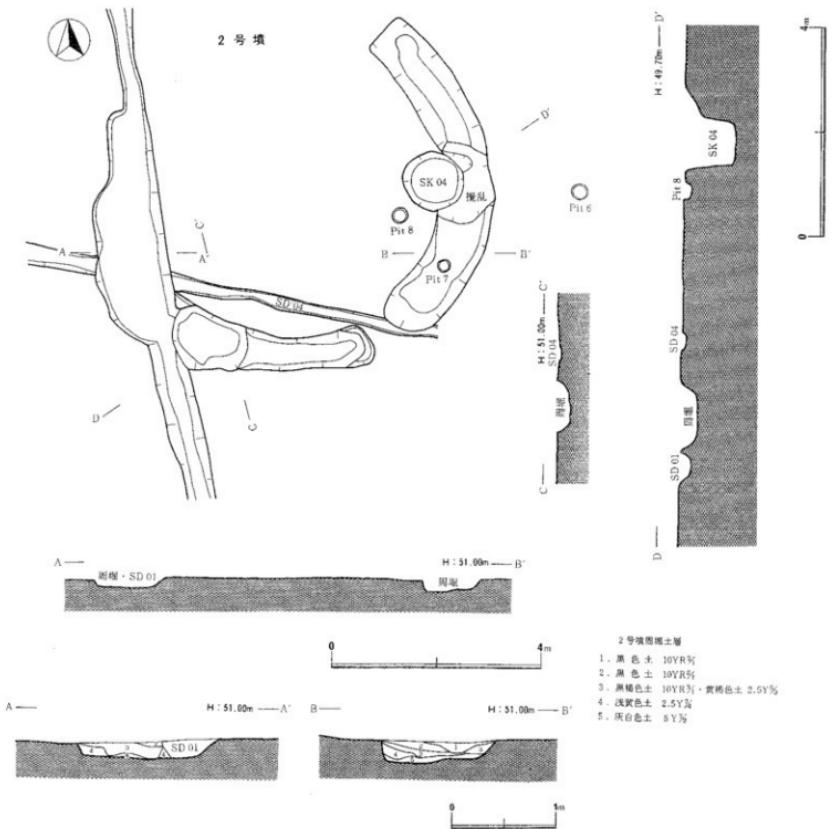
第10図 1号墳出土土器(3)



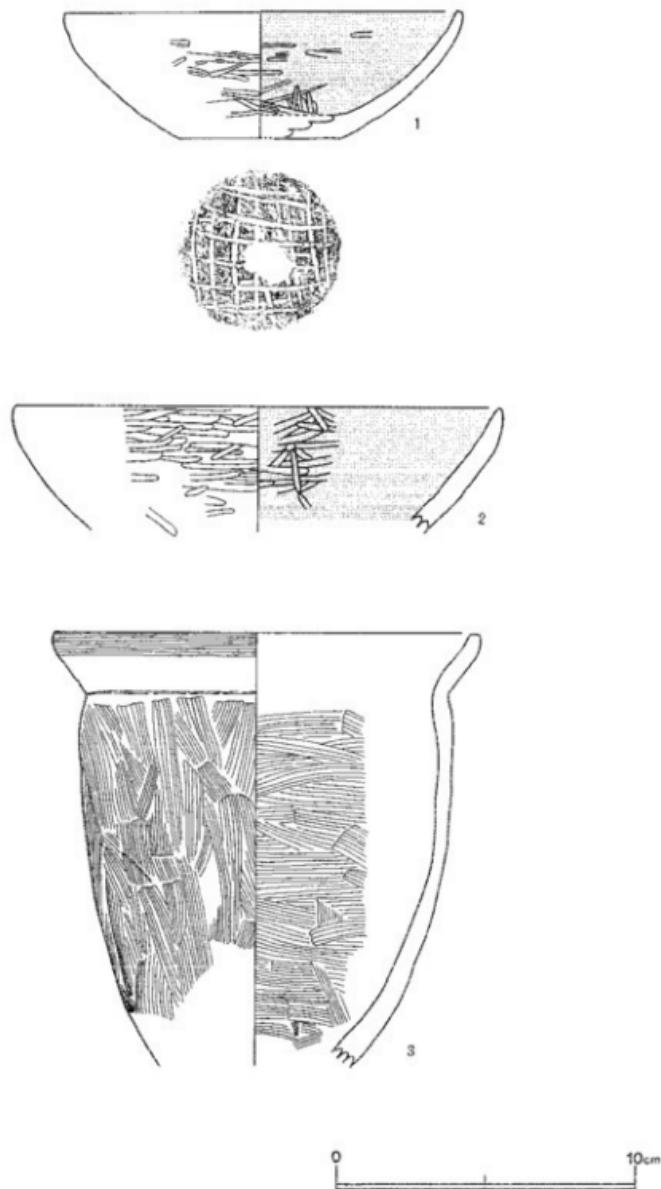
第11図 1号墳出土遺物(4)

第3表 1号墳出土遺物観察表

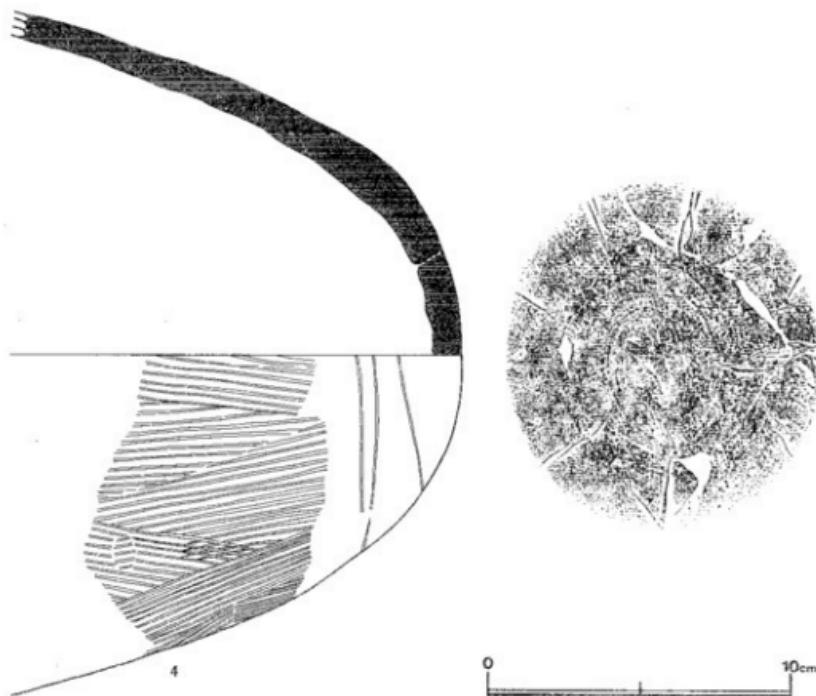
件 番 号	出 版 番 号	器種・器形	部 位	外 面		内 面		成 形	土 色	状 態	備 考	
				調 査	色	調 査	色					
1	16-1	埴輪脚杯	口縁部から底部	ナ	テ	2.5YR5/4灰黄	ナ	テ	2.5YR5/4灰黄	ロクロ	砂粒	良好
2	16-2	埴輪器杯	器部から底部	ナ	テ	7.5YR5/4灰白	ナ	テ	7.5YR5/4灰白	ロクロ	砂粒	良好
3												
4	16-3	埴輪器皿	大部部から脚部	ナ	テ	7.5YR5/4灰白	ナ	テ	7.5YR5/4灰白	ロクロ	砂粒	良好
5	16-5	土師器皿	底	ナ	テ	7.5YR5/4灰白	ナ	テ	10YR5/4灰白	ロクロ	砂粒	普通
6	16-7	土師器皿	口縁部から底部	ナ	テ	2.5YR5/4灰白	ナ	テ	2.5YR5/4灰白	ロクロ	砂粒	良好
7	16-6	土師器皿	口縁部から底部	ナ	テ	2.5YR5/4灰白	ナ	テ	2.5YR5/4灰白	ロクロ	砂粒	良好
8	16-8	土師器皿	脚部から底部	ハ	ケ	7.5YR5/4灰白	ハ	ケ	10YR5/4灰白	非ロクロ	砂粒	良好
9	16-4	埴輪器皿	口縁部から脚部	ナ	テ	7.5YR5/4灰	ナ	テ	7.5YR5/4灰	ロクロ	砂粒	良好
10												
11	17-11	埴輪器皿	口縁部から底部	ナ	テ	5YR5/4灰	ナ	テ	5YR5/4灰	ロクロ	砂粒	良好
12	17-9	土師器皿	底	ナ	テ	10YR5/4灰白	ナ	テ	10YR5/4灰白	非ロクロ	砂粒	普通
13												
14	17-10	土師器皿	口縁部	ナ	テ	10YR5/4灰白	ナ	テ	7.5YR5/4灰白	ロクロ	砂粒	良好
15												
16												
17												
18												
19												
20												
21												
22												
23												
24												
25												
件 番 号	出 版 番 号	器種・器形	部 位	大きさ (単位: mm)				量				
				長 さ	幅 さ	厚 さ	重 量 (g)	量	量	量	量	
26	19-1	刀子	刀部 破片	24.0	10.0	4.0	1.0					
27	19-2	刀子	刀部 破片	25.5	13.0	6.0	2.3					
28	19-3	刀子	刀部 破片	42.5	20.0	5.0	6.5					
29	19-6	鉢	鉢 部 破片	44.5	16.0	10.0	4.9					
30	19-7	鉢	基部 破片	30.0	7.0	5.0	1.9					
31	19-4	石	石 完形	35.5	17.5	2.0-3.5	1.6					
32	19-5	石	石 完形	20.0	11.5	3.5	0.5					



第12圖 2号填実測図



第13図 2号墳出土土器(1)

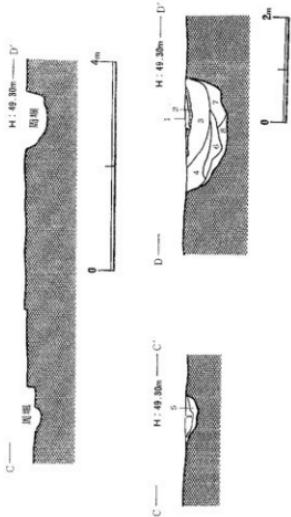
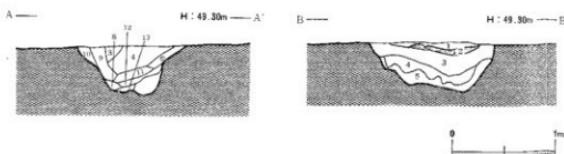
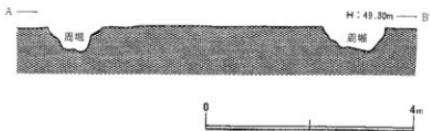
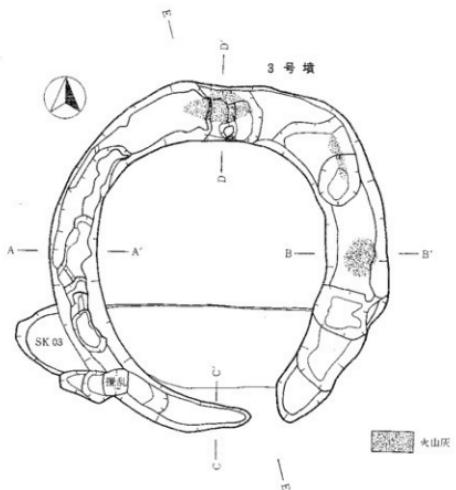


第14図 2号墳出土土器(2)

第4表 2号墳出土土器観察表

捕獲番号	団体番号	器種	部位	外表面		内表面		成形	胎土	焼成	備考
				調整	色調	調整	色調				
1	18-1	土師器杯	完形	ヘラミガキ	10YR 5% 淡黄橙	ヘラミガキ	N 1% 黒	非口クロ	砂粒	良好	底部穿孔 内面黒色處理
2		土師器杯	口縁部	ヘラミガキ	10YR 5% 淡黄橙	ヘラミガキ	10YR 5% 黒	非口クロ	砂粒	良好	内面黒色處理
3	18-2	土師器甕	口縁部から 胸部下端	ハケ目	10YR 5% 淡黄橙	ハケ目	10YR 5% 淡黄橙	非口クロ	砂粒	普通	
4	18-3	須恵器 瓶	胴部	タタキ目	10BG 5% 黒青	アテ具痕	10BG 5% 黑青灰		砂粒	良好	

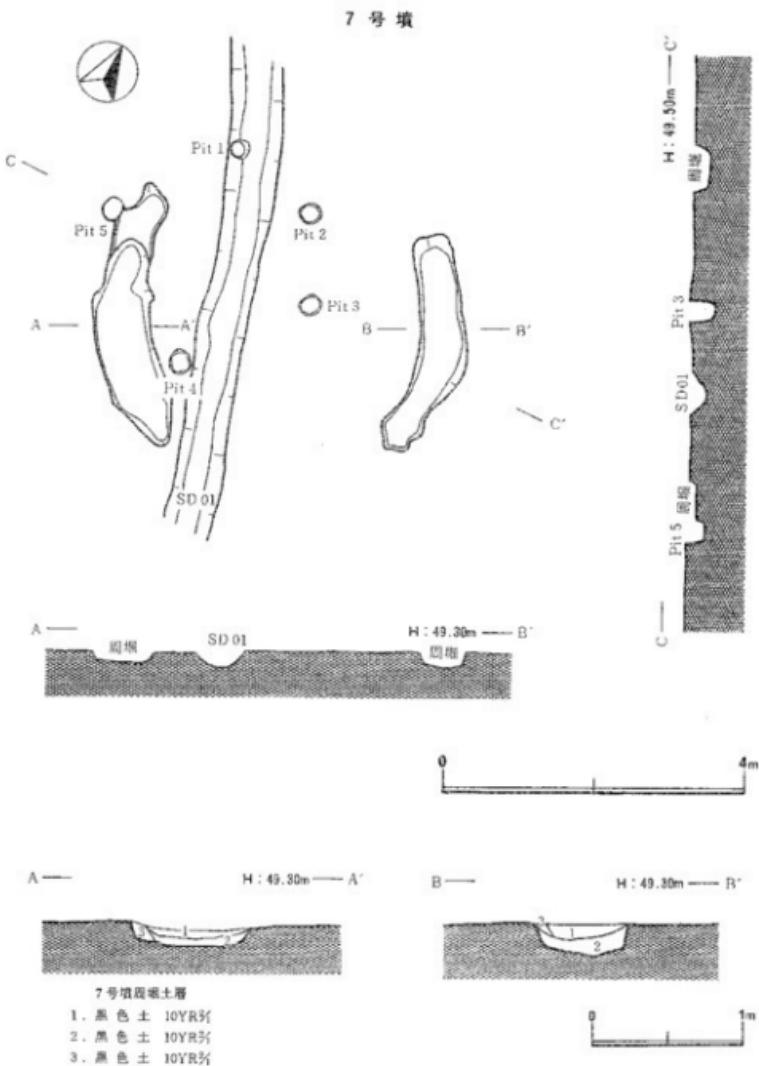
— 3 —



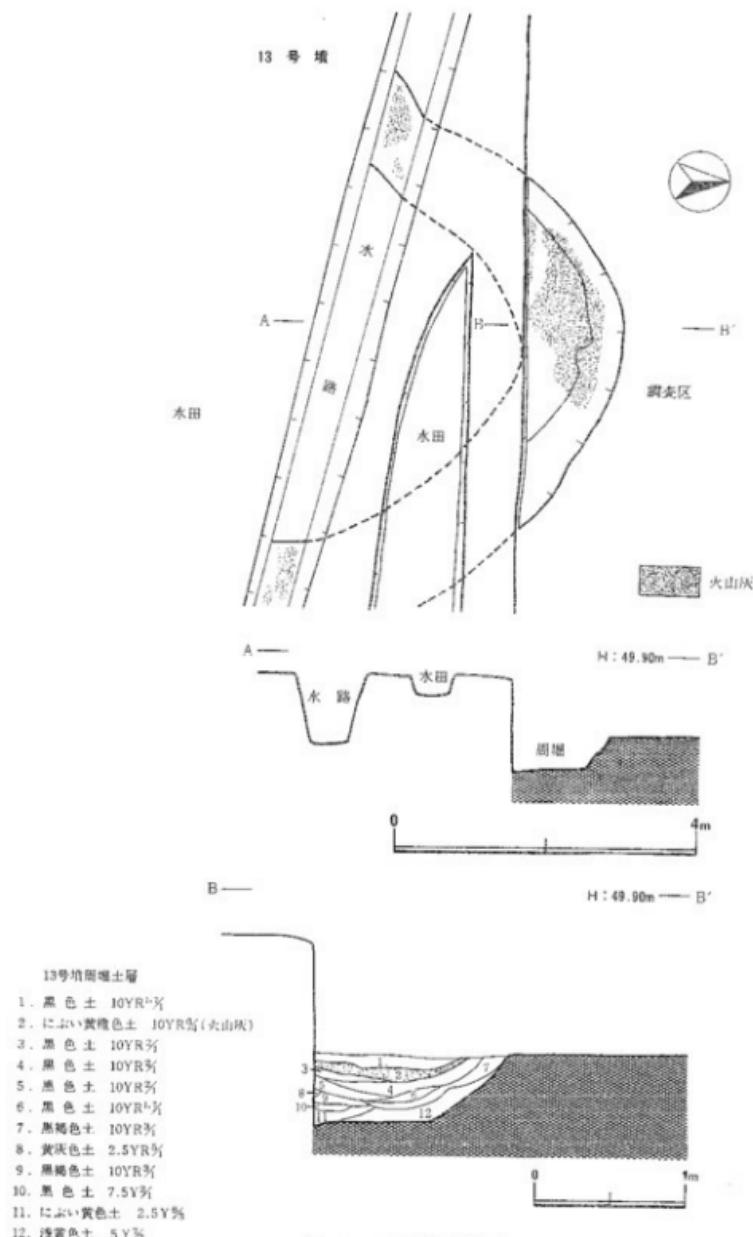
#### 3号墳剖面土層

1. 黒色土 7.5YR 5%
2. 淡灰褐色土 10YR 5% (火山灰)
3. 黒色土 10YR 5%
4. 黒色土 10YR 5%
5. 灰褐色土 5 Y%
6. 黑色土 10YR 5%
7. 黑色土 10YR 5%
8. 淡黄色土 5 Y%
9. 黑色土 10YR 5%
10. 黄褐色土 2.5YR 5%
11. 黑色土 7.5YR 5%
12. 黑褐色土 10YR 5%
13. 黑褐色土 10YR 5%
14. 黑白色土 5 Y%

第15図 3号墳実測図



第16図 7号墳実測図



主体部：検出されなかった。

遺構の切り合い関係：S D01溝に切られ、ピット1～5を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

### 13号墳（第6・17図、第15図版）

位置：L F46・L G46グリッド。調査区外南側の水田。

墳丘部：大部分が調査区外南側の水田に位置しているため、墳丘残存の有無を確認することはできなかった。

周堀：L F46・L G46グリッドの南壁下の地山面で検出された。検出時は他の遺構と考えたが、調査区外南側の排水路を調査したところ、5.20mの間隔をもって東部と西部に火山灰を混入する周堀を地山面で検出した。このことから平面形はほぼ円形を呈するものと思われ、規模は内周の直径5.20m、外周の直径8.00m、上面幅1.40mであると推定される。深さは0.38～0.51mである。底面はほぼ平坦である。周壁面は外周壁が急傾斜で立ち上がっている。内周壁は検出することができなかった。

主体部：墳丘部と同様に確認することはできなかった。

遺構の切り合い関係：なし

出土遺物：遺物は出土しなかった。

## 2. 土 墳

本調査において、土壙4基を検出した。

### S K01土壙（第18図）

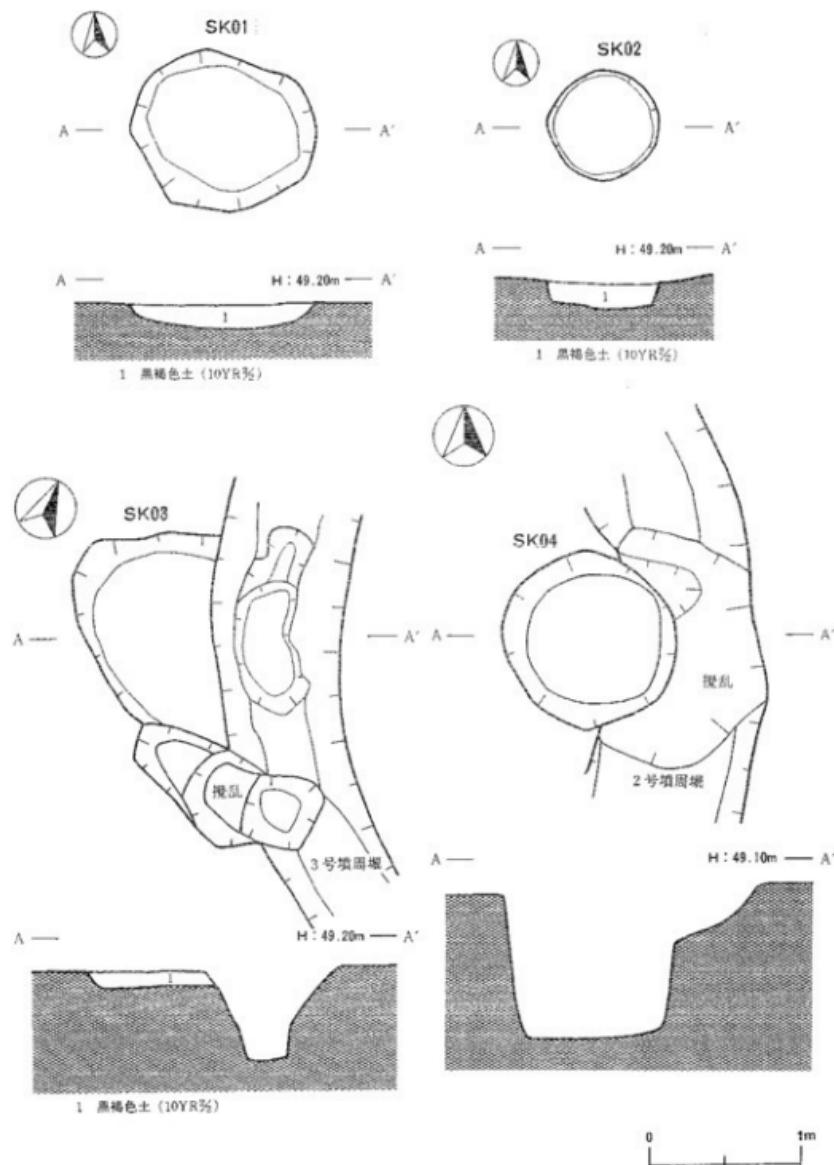
M H46グリッド内の地山面で検出された遺構で、平面形は梢円形を呈し、長軸1.28m、短軸1.06m、深さ0.17mである。底面は丸みを帯び、壁面は緩やかな傾斜で立ち上がっている。埋土は浅黄色土粒子、炭化物を含む黒褐色土である。遺物は繩文土器片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

### S K02土壙（第18図）

M H50グリッド内の地山面で検出された遺構で、平面形は円形を呈し、直径0.74m、深さ0.19mである。底面はほぼ平坦であり、壁面は垂直に近く立ち上がっている。埋土は浅黄色土粒子、炭化物を含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

### S K03土壙（第18図）

L G48・L H48グリッドにまたがって、第III層で検出された遺構で、東部を3号墳周堀に切られている。平面形は梢円形を呈し、長軸1.35m、短軸0.93m、深さ0.10mである。底面はほぼ平坦であり、壁面は急傾斜で立ち上がっている。埋土はにじい黄橙色土粒子、浅黄色土粒子



第18図 SK01・02・03・04土壤実測図

を含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

#### S K04土壙（第18図）

MA47・MB47グリッドにまたがって、地山面で検出された遺構で2号墳周堀を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、長軸1.20m、短軸1.16m、深さ0.94mである。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は上部層が黒色土で下部層は黒色土粒子を含むにぶい黄色土である。遺物は出土しなかった。

以上、出土遺物からS K01土壙は縄文時代のものと判断できたが、他の土壙については、遺物が出土しなかったため時代を特定することはできなかった。

### 3. 溝 跡

本調査において、溝跡3条を検出した。

#### S D01溝（第6図）

調査区の中央部に位置し、S D04溝に切られ、2号墳、7号墳、ピット1を切って南北に延びている溝で、長さ17.90m、溝幅0.37~1.40m、深さ0.15~0.21mである。埋土は炭化物、浅黄色土粒子を含む黒褐色土である。遺物は縄文土器片、土師器片と鉄鎌の基部（第19図1~3）の小破片が若干出土したが、鉄鎌片以外に図示できるものはなかった。

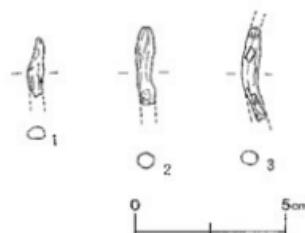
#### S D04溝（第6図）

1号墳、2号墳、S D01溝を切って、調査区の北西から南西に延びている溝で、長さ35.50m、溝幅0.22~0.55m、深さ0.04~0.13mである。埋土は炭化物、浅黄色土粒子を含む黒褐色土である。遺物は縄文土器片、須恵器片（第20図）、土師器片が若干出土したが、須恵器片以外に図示できるものはなかった。

#### S D06溝（第6図）

調査区の東部に位置し、南北に延びている溝で、長さ17.00m、溝幅0.55~0.58m、深さ0.22mである。埋土は浅黄色土ブロックを含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

以上、これらの溝跡は、土地所有者の藤田・佐藤両氏の証言で、S D01溝は昭和30年頃の耕地整理前まで



第19図 SD01溝跡出土遺物



第20図 SD04溝跡出土土器

あった水路跡であり、SD04・06溝はつい最近まで使用されていた排水路跡であることがわかった。

#### 4. ピット状遺構

本調査においてピット状遺構を9基検出した。ピット1～5（第16図）までは7号墳、SD01溝に切られ、これらの内外にあり、ピット6～8（第12図）までは2号墳の内外にある。ピット9はM.I.48グリッド内で検出された。各々の計測値は、ピット1：直径27cm・深さ32cm、ピット2：直径32cm・深さ21cm、ピット3：直径30cm・深さ29cm、ピット4：直径33cm・深さ15cm、ピット5：直径33cm・深さ25cm、ピット6：直径33cm・深さ17cm、ピット7：直径29cm・深さ12cm、ピット8：直径31cm・深さ10cm、ピット9：直径31cm・深さ21cmであった。また、埋土はピット1～5までは浅黄色土粒子、黄灰色土粒子を含む黒褐色土で、ピット6～9までは浅黄色土粒子を含む黑色土である。全てのピットは、地山面で検出されたもので、遺物は出土しなかった。

以上、遺物が出土しなかったため時代を特定することはできなかった。

### 第5章 まとめ

本年度発掘調査の実施された蝦夷塚古墳群の所在地は、検出された遺構・遺物から繩文時代・奈良時代・平安時代の複合遺跡であることが判明した。

今回主たる調査対象となった古墳遺構は、水田造成（昭和30年頃の耕地整理）のために墳丘部がすでに失われており、主体部も残存していなかった。また4号墳・13号墳については、大部分が調査区外にあり、墳丘および主体部の残存の有無を確認することはできなかった。このため、調査区内に残存する古墳周囲を調査するにとどまったが、以下の点について知ることができた。

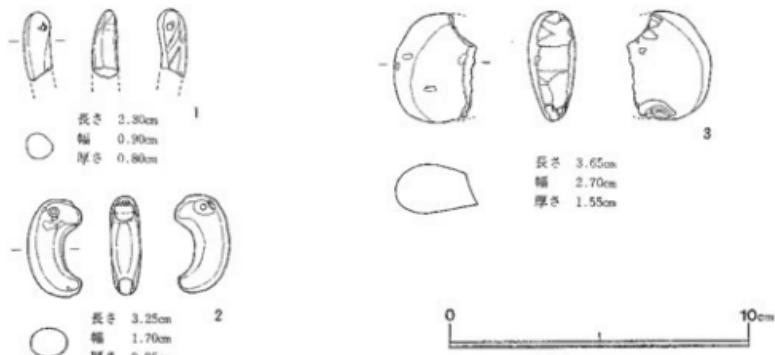
①古墳の規模は、最小の古墳である7号墳で周囲内周の直径約3.56m、外周の直径約5.04m、最大の古墳である1号墳で周囲内周の直径約7.80m、外周の直径約10.80mであり、他の古墳はこの両者の間に位置付けられる。②古墳周囲の形態は、周囲が全周している1号墳と周囲が全周せず南東部に開口部を持つ3号墳の2タイプである。③各古墳の間隔は一定していないが、空間にある程度の余裕がみられる。古墳どうしの切り合い関係はない。④ほとんどの古墳周囲には、確認面において火山灰が混入している。

蝦夷塚古墳群は雄物川の近くに立地する古墳群であるため、主体部（遺骸埋葬施設）と墳丘部には河原石などが使用されているものと予測して調査を行ったが、前述したごとく墳丘は失われていたため明確にこれらを知ることはできなかった。だが、古墳周囲内外および調査区域内には河原石がひとつも検出されなかつたことから、墳丘内外の施設には河原石などを使用せず、主体部は木棺直葬でこれを覆う墳丘は地上2~3m位の盛土であったものと復原しておきたい。

さて、当古墳群の成立時期を把握する資料として、1号墳出土の底部穿孔の土師器甕（第9図12）と、2号墳出土の底部穿孔の内面黒色処理された土師器杯（第13図1）・土師器甕（第13図3）がある。1号墳出土の甕は周塙南東部の底面に近い埋土中から押しつぶされたような形で出土したものである。2号墳の杯・甕の出土位置は南東開口部の西部周塙で、杯は周塙底面から正位して出土し、甕はこの杯の数cm上から一括して出土したものである。その出土状態からこれらの土器は埋納されたものであり、時期は8世紀中頃と思われる。したがって蝦夷塚古墳群もこの頃に構築されたものであると考えられる。

また、1号墳周塙北西部の焼土上面およびその付近から出土した須恵器・杯・蓋・壺・土師器杯・甕（第8図、第9図10・11、第10図）などは、9世紀後半以降の平安時代の遺物と考えられる。

最後に、13号墳の検出によって蝦夷塚古墳群の範囲は、現調査地よりさらに南側に広がっていくことがわかった。さらに、本調査区からは玉類の出土はなかったが、思いがけなく調査区外北側の黒色表土の厚い畑地で、2個の勾玉と勾玉の原石と思われる石（第21図）を表探することができた。このことから、墳丘部や主体部が残存している可能性が考えられた。今後、今回の調査で把握できなかった墳丘・主体部などの諸点と、古墳群の範囲を解明するこの地の調査を期待して結びとする。



第21図 調査区外北側畑地表探遺物

## 参考文献

- 山形縣文化財保護協會『山形縣の古墳』1953（昭和28年）
- 雄物川町文化財委員會『雄物川町郷土史資料』第1集 1959（昭和34年）
- 奈良修介・豊島 昂「秋田県南秋田郡五城目町岩野山古墳」『秋田考古学』第19号 1961（昭和36年）
- 岩手県教育委員會『五条丸古墳群』1963（昭和38年）
- 奈良修介・豊島 昂『秋田県の考古学』郷土考古学叢書 1967（昭和42年）
- 秋田県教育委員會『足田遺跡第6次発掘調査略報』1972（昭和47年）
- 羽後町教育委員會『足田遺跡第7次発掘調査略報』1974（昭和49年）
- 藤田亮策監修・日本考古學協会編『日本考古學辭典』1974（昭和49年）
- 高柳光寿・竹内理三編『日本史辭典』1974（昭和49年）
- 秋田県教育センター『秋田のあゆみ』秋田県郷土教育資料歴史編 1976（昭和51年）
- 内田武志・宮本常一『菅原真澄全集』第六卷 1976（昭和51年）
- 横手市教育委員會『郷土館窓跡』1976（昭和51年）
- 秋田県『秋田県史』考古編 1977（昭和52年）
- 三上礼子「秋田県における古墳遺跡について」『秋田考古学』第34・35合併号 1978（昭和53年）
- 岩手県江釣子村教育委員會『猫谷地・五条丸古墳群』（増補再刊）1978（昭和53年）
- 岩手県教育委員會・日本道路公團『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』1979（昭和54年）
- 雄物川町役場『雄物川町郷土史』1980（昭和55年）
- 岩手県教育委員會・日本国有鉄道盛岡工事局『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書V』1980（昭和55年）
- （財）岩手県埋蔵文化財センター・建設省岩手工事事務所『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書（I）』1981（昭和56年）
- 江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編『日本考古學小辭典』1983（昭和58年）
- 玉口時雄・小金井靖『土師器・須恵器の知識』考古学シリーズ17 1984（昭和59年）
- 川西町教育委員會『天神森古墳発掘調査報告書』1984（昭和59年）
- 岩崎卓也『古墳時代の知識』考古学シリーズ6 1984（昭和59年）
- 秋田県教育委員會『遺跡詳細分布調査報告書』1984（昭和59年）
- 雄物川町郷土資料館『雄物川町郷土資料館報告』第2号 1985（昭和60年）
- 白石太一郎『古墳の知識I - 墳丘と内部構造』考古学シリーズ19 1985（昭和60年）

# 別編 I 蝦夷塚古墳群の火山灰

庄子 貞雄・山田 一郎（東北大学農学部）

蝦夷塚古墳群第1号墳の周堀には細粒で灰白色（乾て10YR%、湿て10YR%）の火山灰が認められる。この火山灰の一次鉱物組成（0.1~0.2mm部分）と粒度組成をしたところ、この火山灰は先に分析した平鹿遺跡（所在地 秋田県平鹿郡塙田町増田字平鹿）の火山灰と極めて類似していた。<sup>(註1)</sup>

第5表には蝦夷塚古墳群と平鹿遺跡の両火山灰の一次鉱物組成を示す。重鉱物含量は両火山灰とも4%とその含量は低い。重鉱物組成は蝦夷塚古墳群の火山灰はシソ輝石がほぼ半分で、残りは普通輝石と磁鐵鉱である。軽鉱物組成は火山ガラスがほとんどで残りは斜長石である。火山ガラスの形態はスパンジ状が半数で、その他平面状、繊維状、顆粒状のガラスも認められる。この重鉱物組成、軽鉱物組成、そして火山ガラスの形態は平鹿遺跡中の火山灰と同様の内容である。

第6表には両火山灰の粒度組成を示した。両火山灰とも0.2mm以下の部分が圧倒的であり、極めて細粒である。

筆者らは先に平鹿遺跡の火山灰は一次鉱物組成、磁鐵鉱の化学組成からみて宮城県内に広く分布する灰白色火山灰と同一の火山灰である可能性が強いことを指摘したい。このことから、この蝦夷塚古墳群中の火山灰も宮城県内の灰白色火山灰と同一の火山灰と思われる。なお、宮城県内の灰白色火山灰の年代は10世紀前半と考えられている。<sup>(註2)</sup>

註1 庄子貞雄、山田一郎「秋田県はりま館、大岱II、案内V、払田柵および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析」『平鹿遺跡発掘調査報告書』 pp. 243~247 1983 (昭和58年)

註2 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所紀要』 VII pp. 1~38 1980 (昭和55年)

第5表 一次鉱物組成 (粒度%)

試験名	重鉱物組成				軽鉱物組成				重鉱物 含量 (重量%)	
	シソ 輝石	普通 輝石	普通角 閃石	磁鐵鉱	火山ガラス (形態別)					
					スパンジ	扁平	磁鐵	顆粒		
蝦夷塚古墳群	53	27		20	47	9	14	16	14	
平 鹿	48	18	1%	33	54	7	6	18	14	

第6表 粒度組成 (重量%)

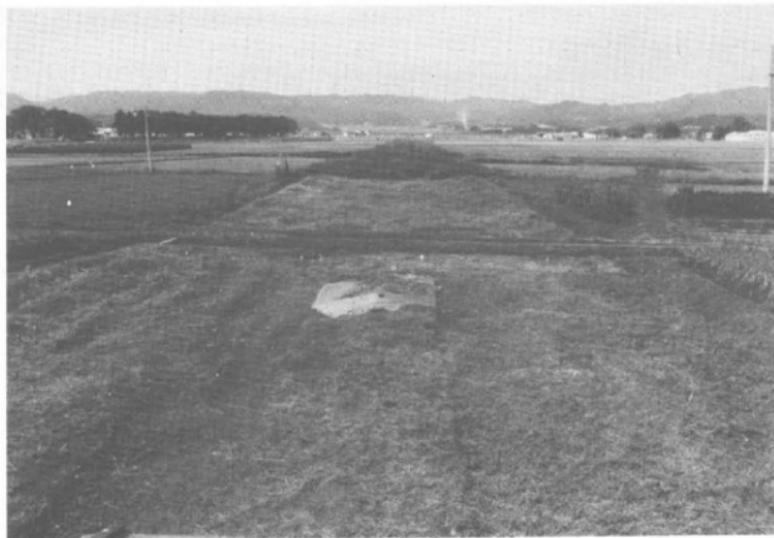
試験名	2mm以上	2~0.2mm	0.2mm以下
蝦夷塚古墳群	1%	1	99
平 鹿	0	6	94



遺跡遠景（北西▶南東）



遺跡遠景（北西▶南東）



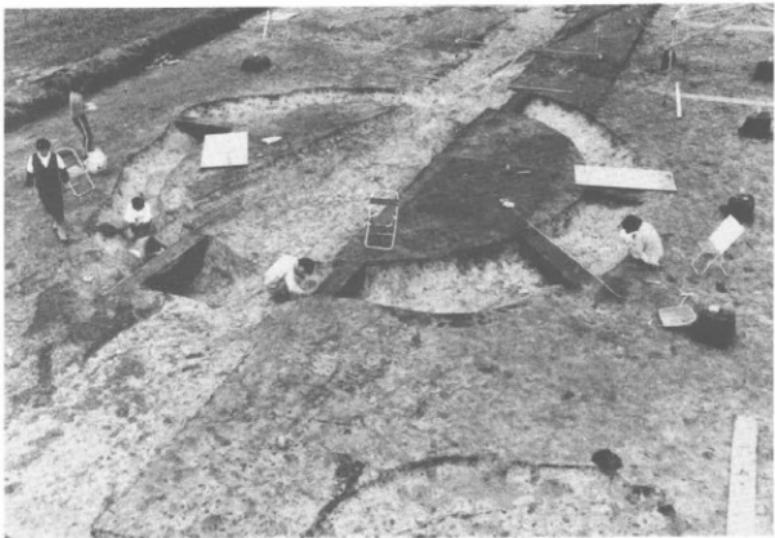
発掘調査前のようにす（東►西）



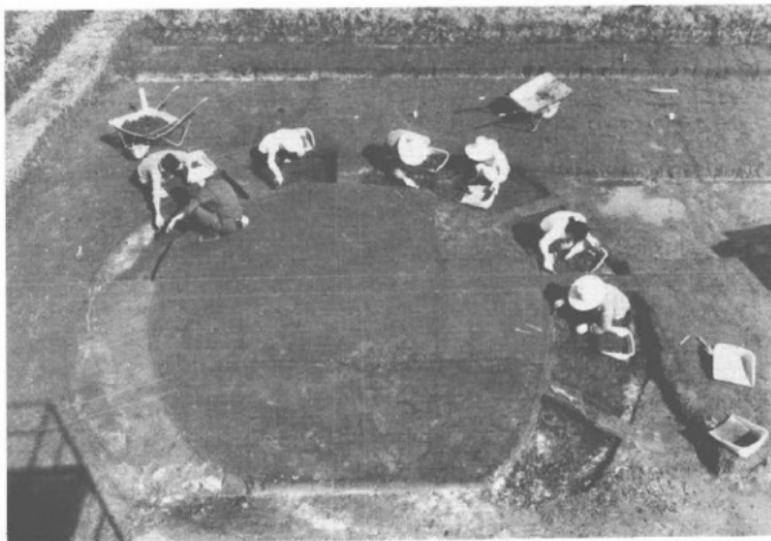
発掘調査終了後（東►西）



調査風景（南東▶北西）



調査風景（北西▶南東）



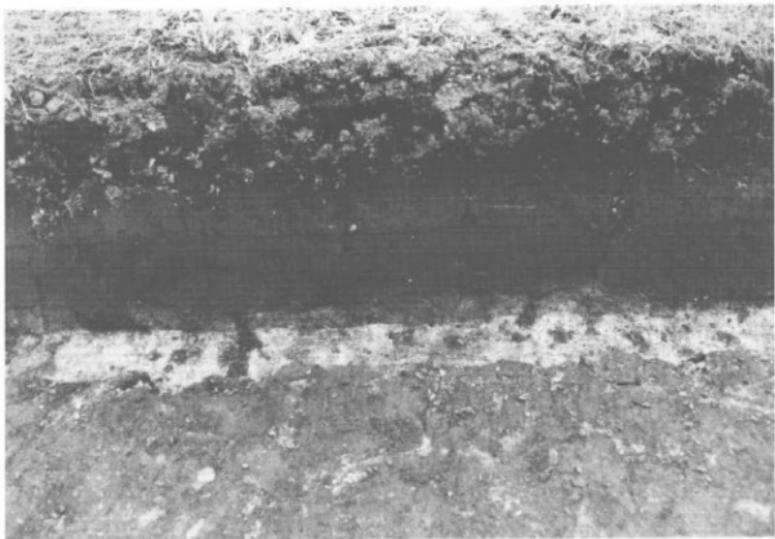
調査風景（南▶北）



調査風景（北東▶南西）



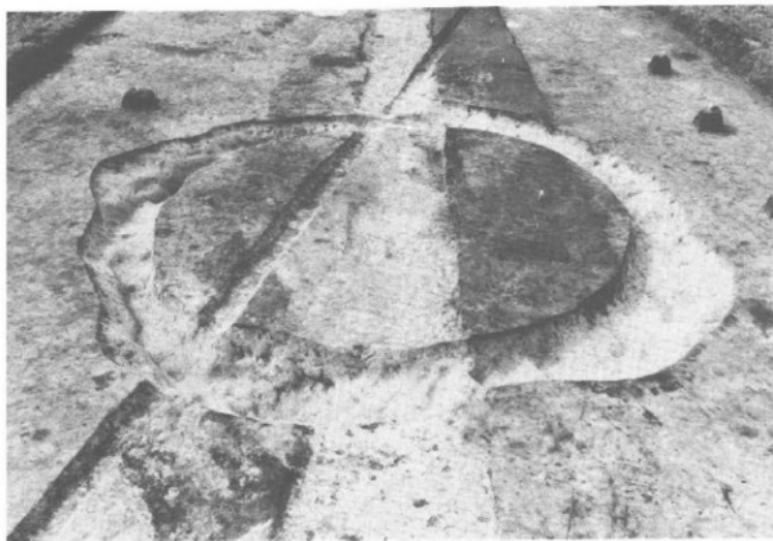
遺跡基本土層（南►北）



遺跡基本土層（南►北）



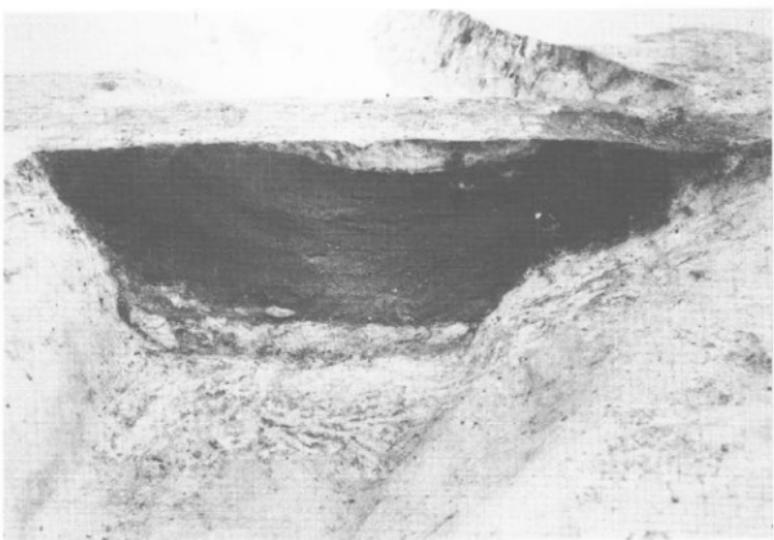
1号填塗状況（東▶西）



1号填塗完掘状況（東▶西）



1号墳周堀火山灰検出状況（北▶南）



1号墳周堀土層（西▶東）



1号墳周堀遺物出土状況（南▶北）



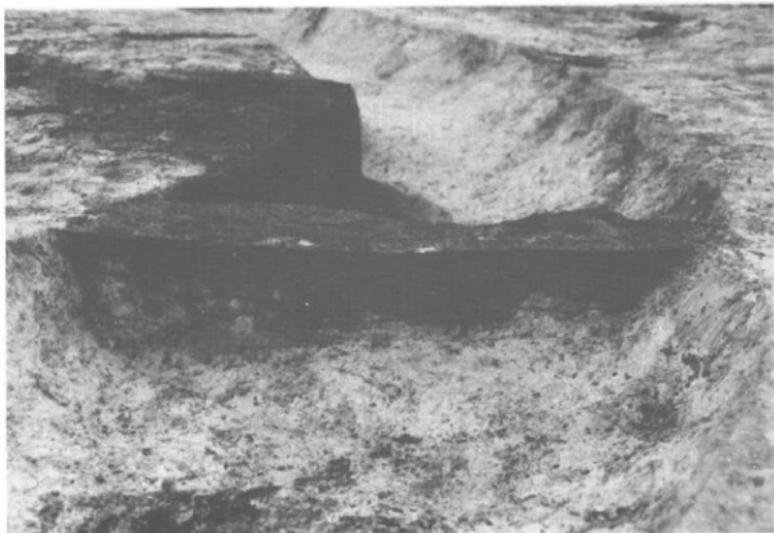
1号墳周堀遺物出土状況（南▶北）



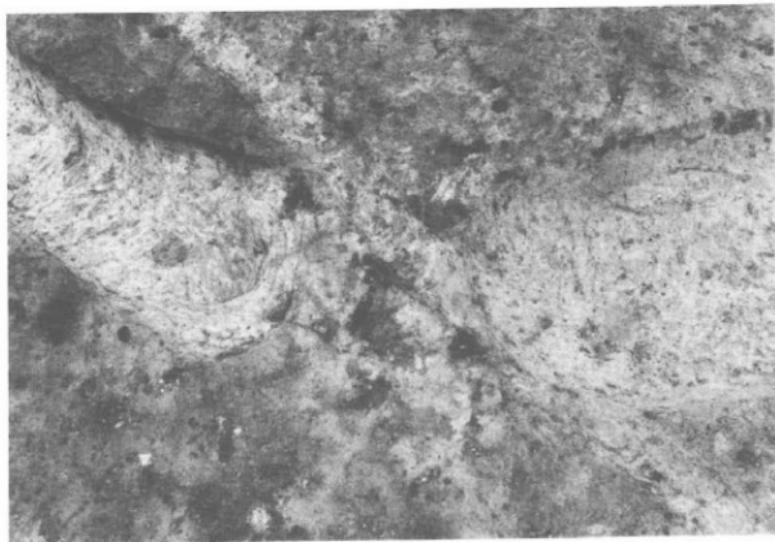
2号填埋状况（北►南）



2号填埋状况（北►南）



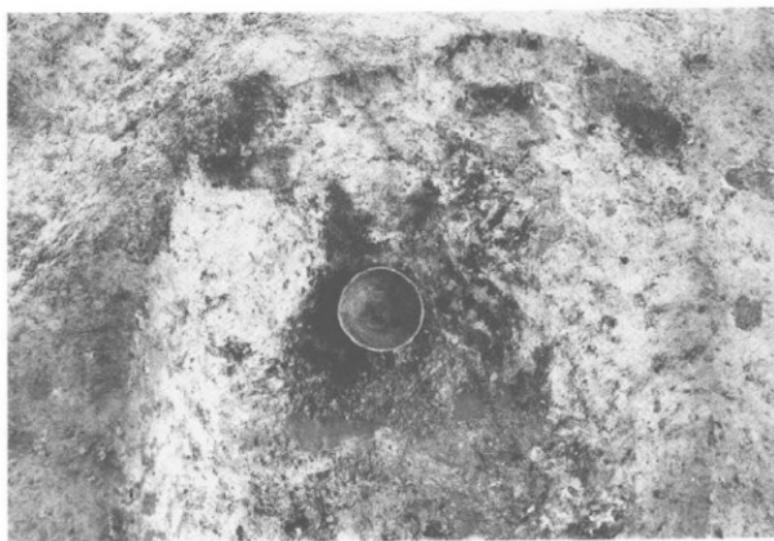
2号墳周塙土層（南▶北）



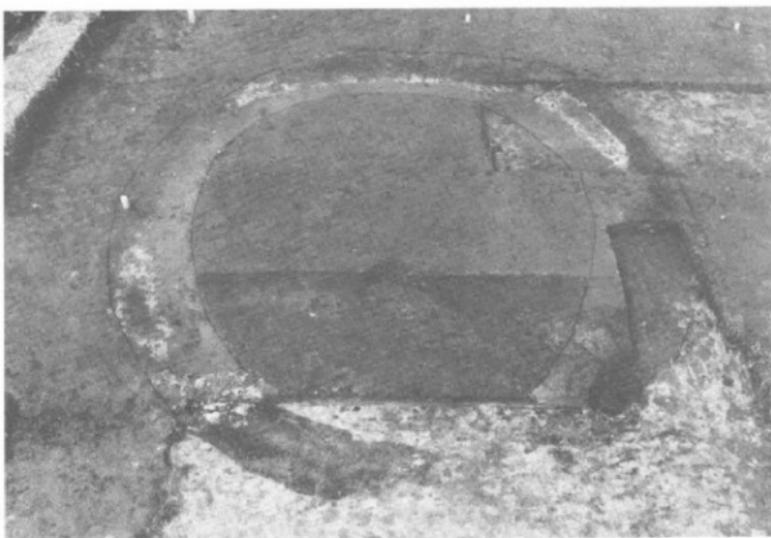
2号墳周塙開口部（真上から）



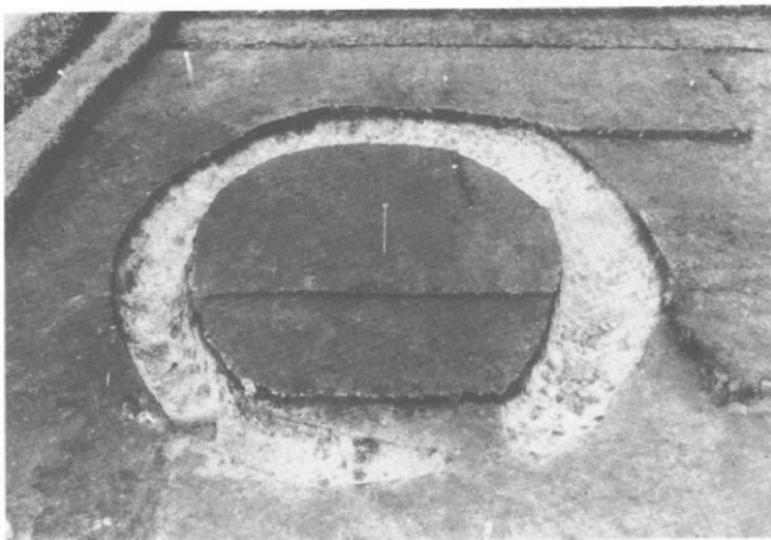
2号墳周堀遺物出土状況（真上から）



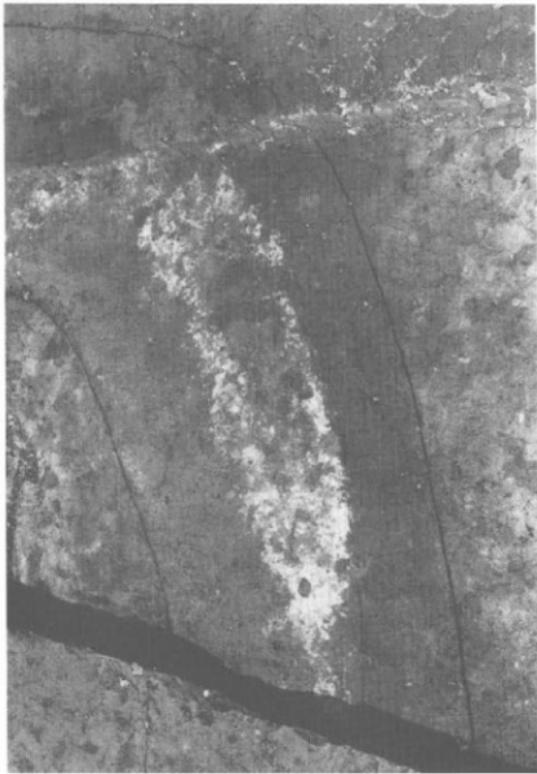
2号墳周堀遺物出土状況（真上から）



3号墳検出状況（南▶北）



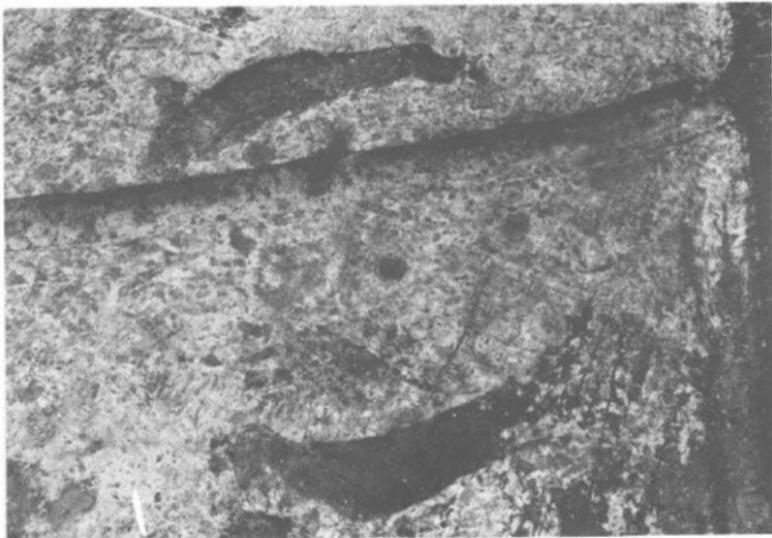
3号墳完掘状況（南▶北）



3號塊周圍火山灰檢出狀況（東►西）



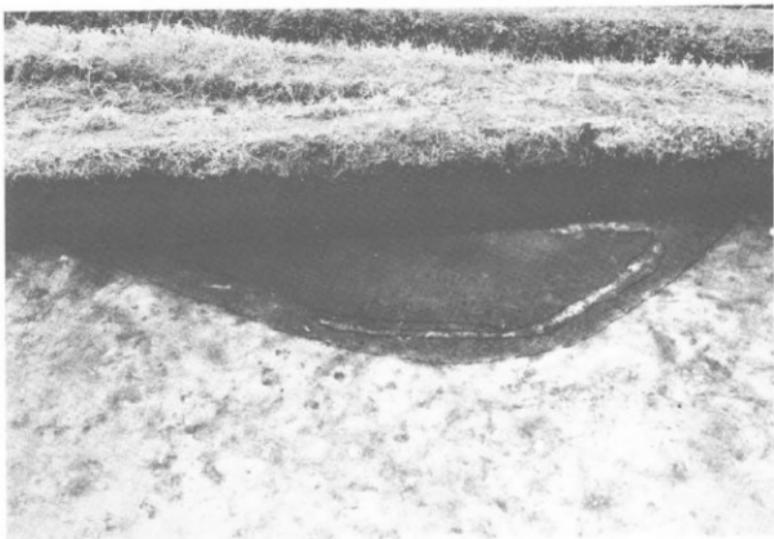
3號塊周圍土壤層（南北）



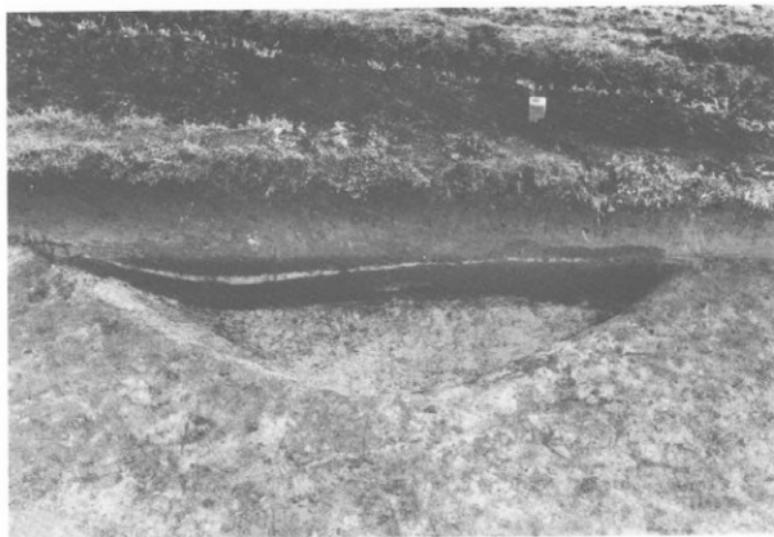
7号墳検出状況（西▶東）



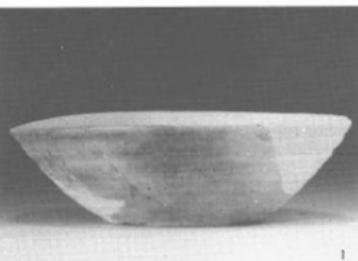
7号墳完掘状況（南▶北）



13号墳検出状況（東▶西）



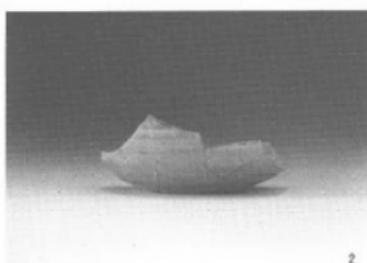
13号墳完掘状況（東▶西）



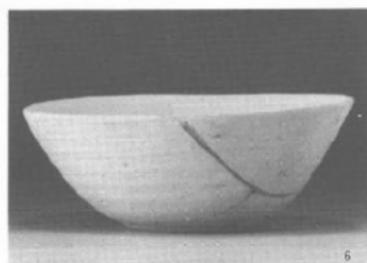
1



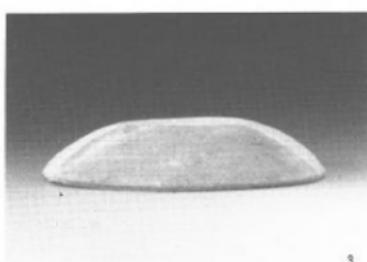
5



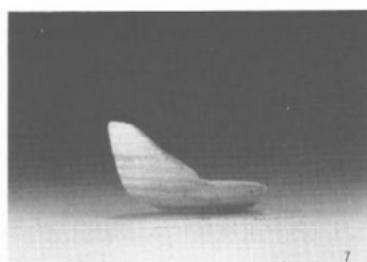
2



6



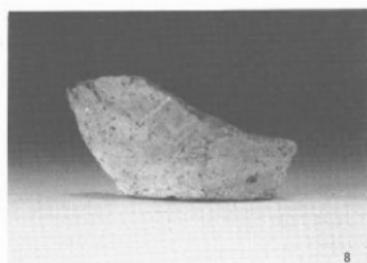
3



7



4

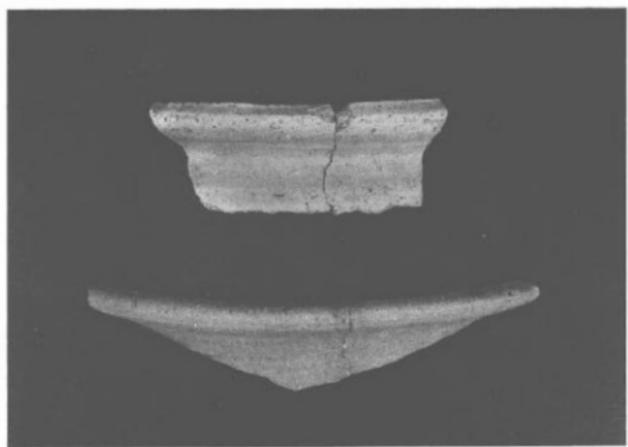


8

1号墳出土土器



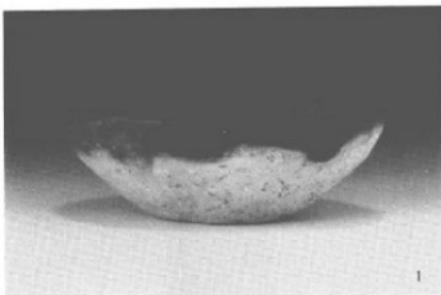
9



10

11

1号墳出土土器



1

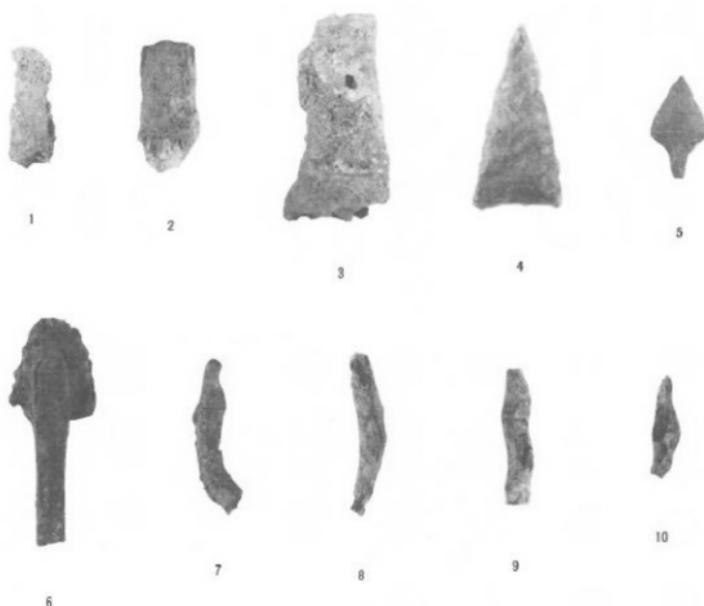


2



3

2號墳出土土器



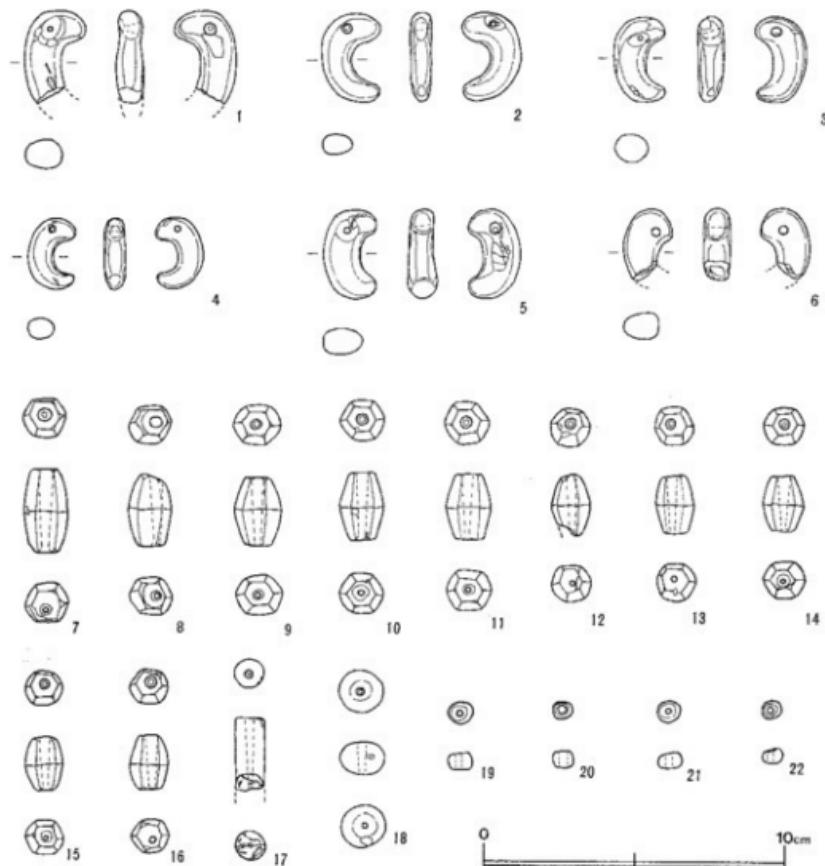
1—7 1号墳出土遺物

8—10 SD01溝出土遺物

出 土 遺 物



調査区外北側烟地表採遺物

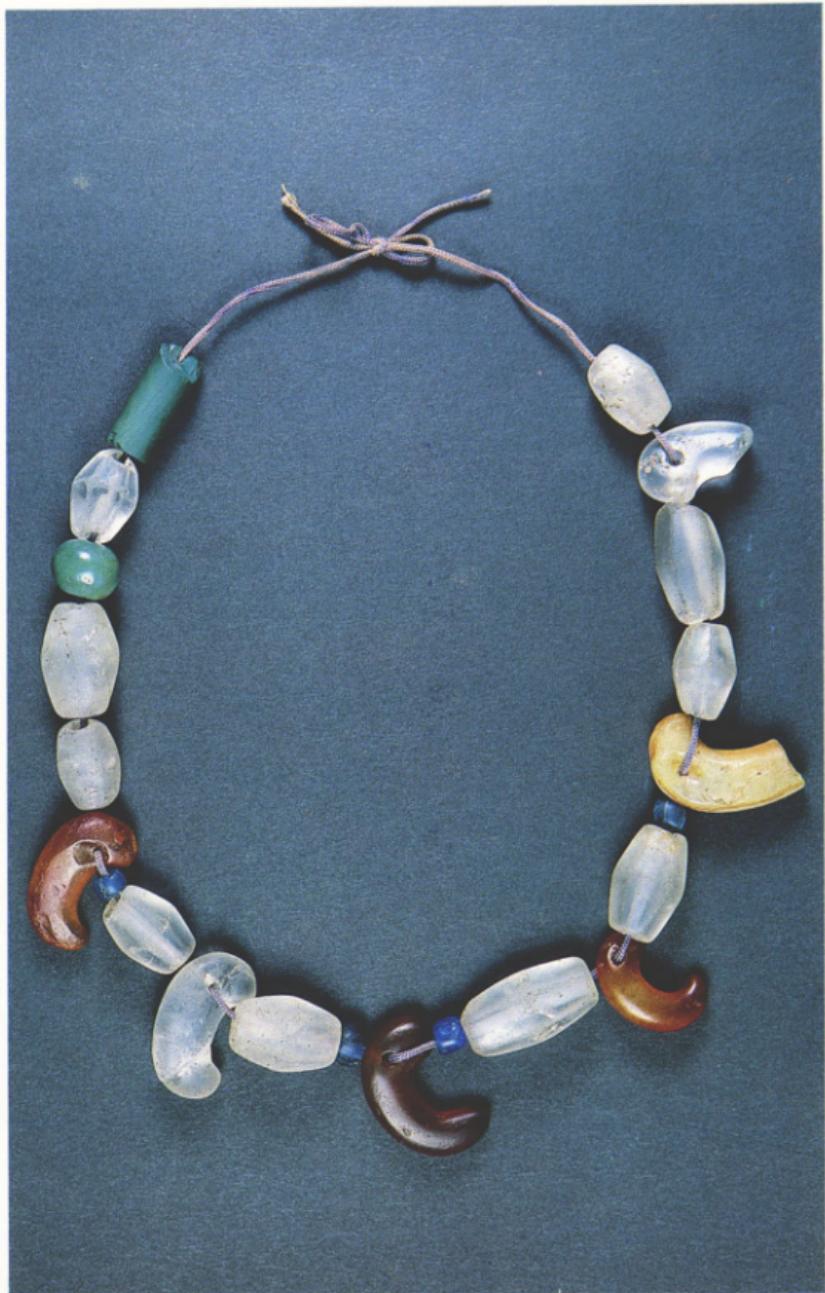


番号	名 称	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	番号	名 称	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
1	瑪瑙勾玉	3.10	1.20	0.95	6.50	12	水晶切子玉	2.00		1.30	3.90
2	瑪瑙勾玉	3.00	1.00	0.65	5.30	13	水晶切子玉	1.95		1.25	4.40
3	瑪瑙勾玉	2.90	1.10	0.90	5.30	14	水晶切子玉	1.90		1.35	4.30
4	瑪瑙勾玉	2.40	0.85	0.70	3.20	15	水晶切子玉	1.80		1.25	3.70
5	水晶勾玉	3.00	1.30	0.85	6.70	16	水晶切子玉	1.80		1.30	4.10
6	水晶勾玉	2.40	1.15	0.90	5.00	17	碧玉大玉	2.45		0.95	4.20
7	水晶切子玉	2.80		1.45	8.00	18	碧玉大玉	1.10		1.50	3.10
8	水晶切子玉	2.40		1.45	6.20	19	緋色小玉	0.60		0.85	0.60
9	水晶切子玉	2.30		1.60	6.80	20	緋色小玉	0.60		0.70	0.40
10	水晶切子玉	2.25		1.50	6.20	21	緋色小玉	0.55		0.80	0.50
11	水晶切子玉	2.20		1.50	6.40	22	緋色小玉	0.50		0.65	0.30

※ 勾玉のみ断面をとったところの幅を測定した

総重量 95.10

蛭夷塚古墳群出土玉類実測図・計測表（参考資料）



蝦夷塚古墳群出土玉類（雄物川町教育委員会所蔵）